

338  
153

5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

始



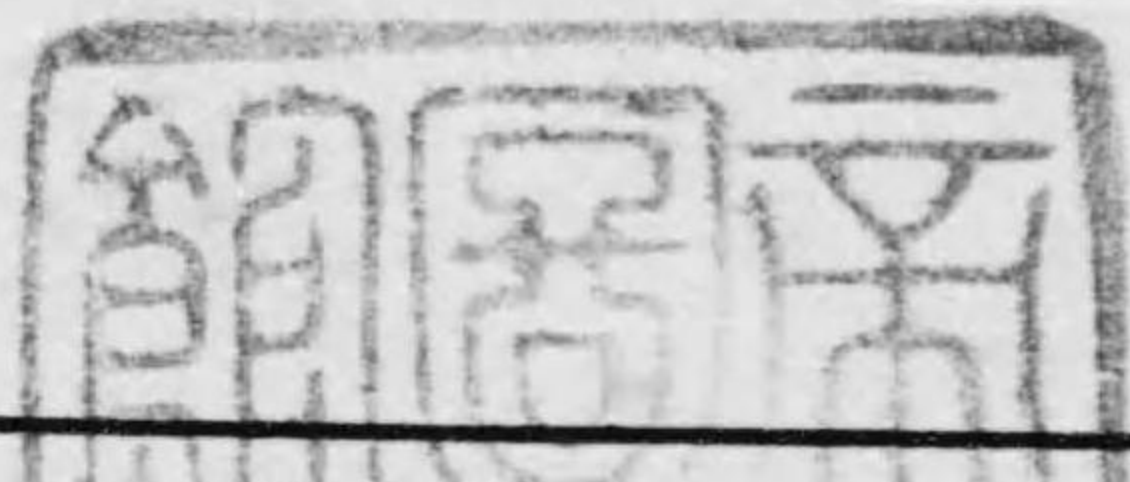
388

153

323  
石 著音瓊波沼

芭蕉句選講話

(卷之春)



沼波瓊音著

芭蕉句選講話

(卷之春)

大正  
2. 5. 20  
内交

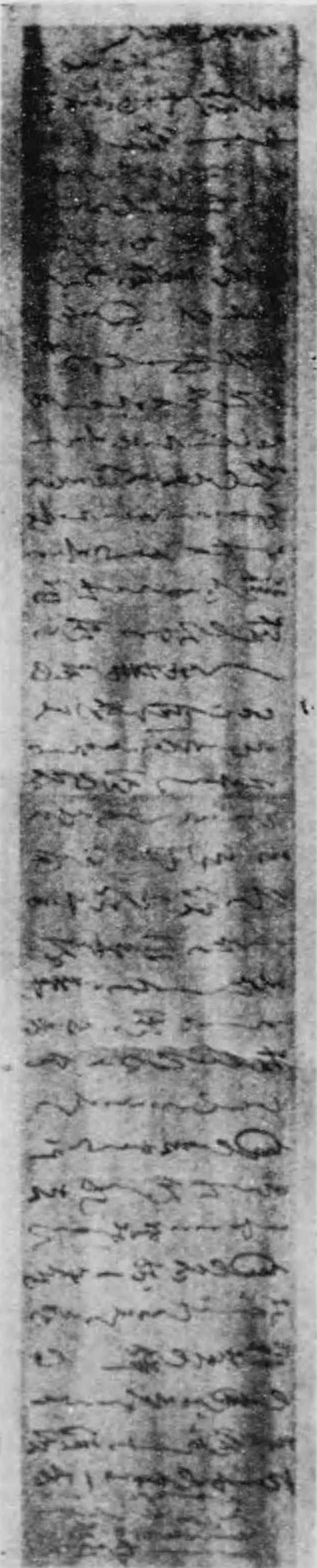
此書一本を義仲寺に送りて  
芭蕉翁尊靈に献ぐるの意を  
致し、  
一本を大野酒竹氏に献げて  
俳諧指導の恩に酬う。



(大野酒竹氏藏)

蚊足筆芭蕉像

芭蕉雜煮餅の狀



(伊賀中仁兵衛氏藏)

## 凡例

この講話は明治四十四年六月一日発行の俳味第二卷第六號以來連載したのを、春之部が完結したので、先づこれだけ一書に纏めて江湖に教を乞ふのである。

句選年考を踏まへて解したのである。同書に載つて居ない句はこの書にも載つて居ない。年考に考證無き句を解するだけの自信を私はまだ有つて居ず、又私はこの解によつて芭蕉其人の世界を紹介したので、必ずしも句を残さず解すると云ふ其事は、當初から私の目的では無かつたのである。

凡

例

年考に出て居る句で、この書に出て居ないのは、芭蕉の句で無いのである。出て居るのは彼書の誤である。彼書の考證中の書名等にも誤が多いが、この書には其と同じとを云毎に其誤を正した。

何の書に斯くありと云ふやうに、其の書名を出すを、是非必要と云場合で無い限り、避けた。過去の註釋書から私等が經驗したやうに、讀者諸君の頭をいらぬとに散漫にするを恐れ、その爲に芭蕉の精神そのものに對する視力の鈍らむを恐れたからである。

この解を成すに就き、河野福太郎氏、久保天隨氏、萩原蘿月氏、長尾素枝氏、に、或は教を乞ひ或は相談をして、得る所が多かつた。爰に諸氏にお禮

を申上げる。

この書を読む方に切望することがある。それはどうか誤と御認め所の、或は云足らぬと御感じの所がありましたら、何卒「東京本郷區西片町十番地沼波武夫」あてに、御知らせを願ひたいと云事です。

大正二年 月 日

瓊 音 識



# 芭蕉句選講話

沼波瓊音

## 〔春の巻〕

芭蕉と云ふ人と相對して見たいと思ふ。芭蕉と云ふ人は俳人で正風を開いた祖と云ふだけでは足らぬと思ふ。すべて何道にまれ大に達したる者は必ずしも斯道のみの人で無く、ひろく人間の意味からいつて高い位置に昇つた者であつて、斯道外の人でも達人の言に服し達人に教へ導かれると云ふ性質のものである。即ち達人は一部分のもので無くて、總括的のもの

である。俳諧をやつて芭蕉の如き決して俳人のみの崇拜すべき人物では無い。其人物の大いなる、そして温き、私の今日の狭い知識では、芭蕉のやうな人物は他に無いと思へる。天才と云はれる人はよくある。併し今日人が天才と認める人には、凡人を逸脱はして居るが、所謂凡人を高めから見下して、蔑視して、冷たい態度をして居る所が多い。芭蕉には少しもそれが無い。俳諧と云ふものを一生懸命に作らうと思つて焦慮して、青筋を立て、無我夢中になつて居る、そして苦心の妙作を出すと云人は、古も今も随分あらう。芭蕉もさう云時代はあつたであらうが、所謂芭蕉なる皓玉の如き人物に到達してからは、唯斯うふうわりとして居て、刺戟に應じて、ほつほつと息を吐く、その息が即ち俳諧になつて居る。芭蕉は自ら製ると云態度で無くて、自然と同一體になつて、芭蕉が作つたか、自然が作つたか

わからぬやうなものを出すのである。

頃日或雑誌に、日本人を脱却せよと云つたやうな題の文があつた。日本人と云ものは如何にも小さい、狭い、この日本人たる事を吾人は脱せねばならぬ、と云意味のことが書いてあつた。或る若先生がこの文を評して、賛意を示して居た。私も痛快に思つた。其意に於ては賛成である。今日の日本人と云ものは、概言してダメだと斷言して宜しい。日本人たることを恥ぢる、などいふ考まで、起ることもある。この問題は長くこゝに云必要は無い。私がこゝに云ひたいのは、その文の中に「そして俳句が文藝だ」と云やうな文句のあつたことである。俳句は短いものだ、見すばらしい形のものだ、日本人は狭小な種族だ。日本人を罵る際に、俳句、これが貴様の文藝かい、と罵りたくなるのは、如何にも有勝ちのことである。

時々友人に云つてゐるのだが、私どもは、十七字の詩そのものをのみ味ひ、作らうと云考は有つて居ぬ。芭蕉も俳諧即ち連句と云團體文藝を主としてやり、發句の獨立したもの即ち十七字詩もやり、文章も數多作り遣した。或る刺戟があつたら、もつと長い／＼作物を作つたかも知れぬ。併し長いものを作らなかつた點に於て、私は決して憾とはせぬ。芭蕉と云淨高なる人物は、現在の短い作品で十分に流露して居る。藝術は人格の流露其ものである。此外に藝術の意義は無いのだ。俳味の運座會で萩原蘿月子が、藝術非藝術と叫ばれたのは此所のことである。芭蕉と云やうな大きな人格を遺憾なく發露して居る作品があるなら、其作品がたとひ五字六字のみで他に無くても、非常に尊重すべき文藝である。かう云見方からして、私は俳句そのもののみをも輕んじたく無い。一つは俳句そのものが人格流露に非

常に便利な形態性質を有つて居るからでもある。此事は別論にとつておく。俳句を日本人罵倒の材料にするのは餘りに膚淺である。併し尤なる膚淺ではある。

眞摯にやるなら、俳句だけ作つて居ても宜い。併し、これにて得たる俳味なるものを以て、十七字詩、連句、所謂俳文、以外に、小説を書いても戯曲を書いても宜いのである。私の『俳味』は、俳句と稱する十七字詩が上手になる人を多く作らむが爲にのみ發行して居るのでは無い。俳味其のものを體得した人の多くならむことを理想とし目的として居るのである。私がかゝる芭蕉の發句を解くのも、十七字詩そのもの、爲にのみは決して解かないのである。

斯ういつて來ると、何だか私が芭蕉と云人物をよく／＼知得して居るや

うに聞える。知らないのでは無いとの自信はある。併し今まで唯漠然と芭蕉の言を書いたものを見、芭蕉の傳記と稱するものを見、芭蕉の肖像といはれるものを見、芭蕉の郷里を見、筆跡を見、芭蕉の作品を見通したいけで、わからぬ所はわからぬで打捨て、わかる所だけを見て、そして芭蕉と云人物を漠然と知つたやうな心持がしてゐる斗りである。斯う云ことはあるでせうか、これはどう云意味でせう、などと問はれると大抵の場合わからぬと答へねばならぬ。辭句なり事實なりの穿鑿は私どもの爲すべき事業では無い。他にさう云穿鑿に長けた人がいくらもある筈である。私はどこまでも自分の見かたで通して行きたいと思ふ。併しどうも俳道に大才がいくらもありながら具體的に調べるとか紹介するとか云事をする人が如何にも少い。學者風の事業で無くとも、もう少し具體的の紹介或は教示と云事をす

る人があつて欲しいと思ふ。先日鳴雪翁にお目にかつた時、翁が、或獨逸人が俳諧を知らうと思つて、俳諧の歴史、俳諧の規則、芭蕉の傳、其句集に注を加へたもの、これだけの書物を知らせて呉れ、と云つておこした何が宜いでせうとのこと。どうもこれが宜しい、といつて外人に示すに足る書物が、以上四種のいづれにも無いやうな心持がする。まことに心細いことであると思つた。いろいろな方面の俳諧の書籍が續々出てくることを、私は切に天下の俳界大才に望む。

斯う云場合であるから、我もく思ひく大膽にいろいろな事を調べて見ると云風にならねばならぬ、と私も芭蕉の作品を、改めてよく見て、更に判然と芭蕉と云人物に相對して見たい、と思つたのである。芭蕉の發句芭蕉の附合、芭蕉の文章、芭蕉の訓言、芭蕉の消息、といふやうに一切を

片つ端から熟味したいと思ふ。其の第一着手に芭蕉の發句をやつて見ようと思ふのである。

今日までの所では芭蕉の發句の注解で最も良いといはれるのは石河積翠園と云人の著「芭蕉句選年考」である。所がこの本は寫本ばかりで、未だ版本が無い、唯熱心なる俳人が可なり大部なこの寫本を寫して藏して居るだけと云ふので大野洒竹氏と私とがこれを翻刻しようと思つて、明治四三年から四十四年にかけて子の藏本數種によつて校合淨寫したので、私はこの爲に始めて句選年考を精讀した。成程詳しく親切な注解が施してある併し私にはどうも首肯の出來ぬ所もある。又これでは言ひ足らぬとイライラ思ふやうな所もある。そこでこの句選年考で教へられた知識をよく吞込んで、天井を見てフウと息をして、更に芭蕉の句に對して自ら解いて見た

い、と思つた。故に句の順序は句選年考の通りの順序である。句選年考があつたら、それと見くらべて讀んでいたゞきたい。又變挺だと思はれる箇所があつたらどうか書信でお教へ被下やうに、讀者諸君にお願ひします。何も私が諸君に教へるのでも何でも無い。諸君と共に御相談して解いて行きたいのである。

### 蓬萊に聞かばや伊勢の初便り

蓬萊は新年の祝ひの食物昆布柿などを體裁よく飾つて松竹などあしらひ蓬萊山に象どつたものを云。蓬萊に「に」は、「鶯に朝飯おそき下宿哉 鳴雪」の「に」の類で、普通散文のとは少し違ふ。俳句ではよく使はれて頗る重寶な詞である。「Aに……」とあると、Aがある、……と云ことがAと同時又は

同所に行はれると云意である。鶯が鳴いてる、其の時下宿で朝飯を待ちかねて居る、と云句である。蓬萊が飾つてある、芭蕉がその傍に座してこゝへ伊勢の國の者から手紙でも來たら宜いなあと思つて居る。斯う云趣である。この字の使ひ様は後には俳句に普通に使はれてゐるが、この句の出來た頃には餘り類例が無いやうに思ふ。このにを散文のと同じに解してしまふとオイ蓬萊君伊勢の初便りでも聞かせ給へ、と云つたやうな事になつてしまふ。蓬萊に飾つてある伊勢海老に聞かうとするのだと云説のあるのは稍この蓬萊君に近い。支考が、外の人なら「元日に」と云ふところを「蓬萊に」と云つたところが偉いと云つてるのは宜い評である。「元日に」ならば散文のにて解ける。そして平凡になる。「蓬萊に」とあるので、作者の居る場所が一の晝となつて現はれて居るのである。「伊勢の初便り」とは伊勢國からの新年第一の

文通で、其國に居る知つた人から、先づ新年の賀辭を述べ、太廟あたりの神神しき模様など書きそへてあらうと云手紙である。さう云手紙をこゝで落手したらいゝ心持だらう、と云つて見たのである。もつとも太廟のことなど云つてなくつても單に賀辭だけでもそれが伊勢から來たと云のが壯嚴に感ぜられるのである。

芭蕉はこの句が得意らしく、この句を書いたのが比較的多く存在して居るやうである。私が見たものゝ中で二つ記憶して居る。一つは伊賀の上野に居た時に同地の舊家なる醫師中村氏方で見たので、半折位の大きさの紙に大きく珍しく筆太に書いてあつた。今一つは實に俳天下の珍品である。即ち名古屋の錦禰商澤市郎右衛門氏方の秘藏にかゝる。この澤氏は芭蕉の門人澤露川の裔である。露川も名を市郎右衛門といつた。露川が芭蕉を見送つて佐屋へ行つ

て、芭蕉等一行同地の本陣に泊つた。水鶏鳴くと人のいへばや佐屋泊りの句はこの夜出来たのである。芭蕉この夜興に乗じて紙を展げ、本陣の内儀の紅と白粉を借りて、右の上の隅に注連飾を描き、その海老はその紅で彩り、右の下の隅に餅搗の白杵を描き白の中の餅をその白粉で彩り、そして左の方に片寄せて例の細くやさしい字でこの句を書いた。紙の中部は間が抜けた程あいて居る。これを露川が貫つて歸つた。これが今も澤家の至寶になつて居るのである。大切にしてあるので煤けたり汚れたりして居ない、つい、一週間位前に書いたものゝやうに見える。實に俳諧國の國寶たるべきものである。

この句は上品な、落着いた、めでたい句で、芭蕉其人の性格の殊に正しい方面が遺憾なく顯はれて居る句である。たけたかき句とでも評すべし。先達て宮垣角人君が京都から持つて來た蕪村の軸を見ると、守武の「元日や神代

の事も思はるゝ」と芭蕉のこの句とを右の方に恭しく書いて、左の方に自分の「三椀の雑煮かふるや長者ぶり」の句を書き、下に人物を畫いてある。蕪村もこの句を優秀と認めたのであらう。序に云ふが、今蕪村や太祇を面白がる人は、大抵芭蕉の大なる所をよく知らぬ。鬼貫に至つては尙更に顧みぬ。又芭蕉鬼貫を崇む人は、大抵蕪村太祇を輕んずる。この兩趣味は互に敵對の觀がある。しかし蕪村は實に芭蕉を能く解して崇敬して居た人である。太祇は鬼貫を能く解して崇敬して居た人である。この間の心の交渉は注意する價がある。他日の論に譲らう。

年々や猿に着せたる猿の面

年が改まる。人も心を新にする。新にした積りで居るが、一向向上も進歩

も無い。其一年中やはり前年と同じ地點を彷徨して止まる。毎年々々同じことを繰返す。それでゐて新年には誰も大に自ら新になつた心持で居る。これを客觀的に見ると悲劇である。寧ろ滑稽である。その新になつた心持で居るのは、猿が猿の面をかむつて顔がかはつた積りで得意になつてると同じやうなものである。歳新なる毎に猿が猿の面をかむり／＼する。成程變化は見える、面はかむつたのだから）併し變化と云價も無い（同じく猿の面だから）斯う云意を現したのである。師曰く人おなじ所にとまりて同じ所に年落入る事を悔いて云捨てたるとなり」三草紙にあるのに據つて解けば斯うである。芭蕉が申年の生れと云ふことはこの句に關係無い。又この句の出來た元祿六年の前年即ち五年が申年であつたと云ふこともこの句に關係無い。唯々猿を比喻に持つて來たまでのことである。穿つて云へば新春猿まはしの

猿を思ひ寄せたのであらう。この句猿が自ら猿の面をかむると云やうに云つても宜いのであるが、それでは猿が人間らしくなつて仕舞つて比喻が露骨になり無趣味になる。人が猿に着せた、と飽くまで猿らしく云方が面白いのである。

この句芭蕉自ら仕損じの句だと云つた。成程想充ちて字足らぬ感はある。

元日に田毎の日こそ戀しけれ

信州更級郡姨捨山の東麓長樂寺から望むと、名月の夜に田毎の月と云奇觀を見るを得と云。私はまだ見たことが無いから其實景を語ることは出來ぬが、水田に月影がいくつも映つて、田の一劃毎に名月の形を見得るのなさうな。水田に高低があつて其高低の工合が偶然この現象を成すやうに出來て居



るのであらう。この句はその田毎の月を田毎の日と云ことに思ひ付いたのである。元日に更級に居てめでたい日影が田毎に映つて田毎の日の奇観を呈するのを見たら如何にめでたいことであらうと思つたのである。これは芭蕉更級に遊んだ翌年の歳旦の句であらうとのことだ。多分左うであるらしい。強ひて左うなくてはならぬことは無い。

よい句とは思はぬ。田毎の日と云ふことがこの句の命であるが、この命や思ひ付きに聞え洒落に聞え、和合人の日見の宴めきて聞えて、なんだか厭である。又これは餘計なことであるが、中秋の月が田毎の月の現象を成すからと云つて、元日の日がこの現象を成すかどうかわからぬ。その月その日の通り路が違ふからである。併しそんなことを考へてから句を作れとは云はぬ。ふつと思浮べた儘を句にするが可とすべきからである。

誰やらが姿に似たり今朝の春

今朝の春は新春の朝の感じを現はすべき季題である。芭蕉新春の朝の自然人事の高く清らなる光景を見渡して、はてこの様、誰かが姿に似て居るなあ、と云つたのである。白樂天が詩に、端正容貌若陽春と云句がある、これがこの句の出所であるとの説があるが、低い調子の模倣時代の和歌、もちりを生命とする狂歌なら知らず、芭蕉の發句を解するにこれは何から出た〜と、出所探しに努力するのは實に愚だ。今の文學研究屋も往々この愚なる努力をして居る。この句を樂天の句を採用したものとなすのは愚である。但し譬へ方の式は彼と此と同じである。端正容貌若陽春の意が吞込めた人には、この句の意も容易に吞込める筈である。芭蕉の頭には男か女か古代人か現時の人

か知らず、唯髣髴として、端麗清高の人の姿が浮んだのである。今朝の春の  
 氣高さは、この髣髴たる儘の人を以て譬へて始めてよく現はれる具體的に誰  
 誰の姿と若し云つては、氣高さが減ずる。この事は其角も云つて居る。曰く  
 「此句衣通姫とか小町とか置きたらばさもあらず、誰やらと隠してしかも春  
 色の麗しき様を美しき人の姿とたとへたる所餘情限りなきを思ふべし」と。  
 但し女のやうに定めたのは悪い。この句を芭蕉が嵐雪から小袖を貰つた時或  
 は嵐雪の妻から紙衣を貰つた時に吟じたので、誰やらが姿に似たりとは自ら  
 の姿を誰やらが姿に似たりと云つたのだとの説があるが、この句ではどうし  
 てもそんな意には取れぬ。今朝の春を移の春とでもせねば左うは取れぬ。  
 この句髣髴の壯嚴と云ことをよく用ひたもので、芭蕉のやうな大きな人で  
 なくては云へぬ句ぶりである。

都近き所に年をとりて

誰人か薦着ていませす花の春

花の春とは新年の華やかな趣を表はした詞である。どうかすると花の春を  
 花盛りの事と誤解して居る人がある。この句は芭蕉が萬菊丸におくつた手紙  
 の中にもあつて、それにはこの句の前に、「京近き心」とある。京近き所の新春  
 の一物を捕へたのである。描く所は路傍に薦着て寝てる乞食である。その乞食  
 は唯の乞食では無い世外に逍遙して居る高士である。京近きあたりには心高き人  
 が薦着て乞食になつて、門松、禮者に改まりたる世の様をも知らず顔に居る  
 斯う云想像の句である。花の春の色彩の中に汚く左れど尊き薦着た男を一人  
 灰色に描いたのである。「花の春」の「花」の字にこの灰色が相對して妙味を

發揮して居る。

年立つや新年ふくべ米五升

芭蕉庵には米の五升ほど這入る瓢があつて、門人がこれに米を入れて盡きぬやうにして居た。芭蕉と云人は體の生活に就いては全く人に打任せて居た芭蕉の手紙を見ると、「草庵殊外雨もり昨夜など臥所に迷ひ申候今日中によろしく頼入候勿々」、「机の足に致候間大キ竹四尺五六寸可被下候」、「夕飯にはあづきめしと承り樂しみに致候所へ元山より蕎麥と申越候間あづきは明日明日早々」、「箒折れ申候只今被遣下候頼入候」などといふのが見える。芭蕉は斯くて體の保持を他に委して居たのである。瓢をおいて門人等の米を入るゝに任す、これもそれである。芭蕉はこの態度この生活に於て得々として

芭蕉の手紙

「どうだい」と誇る念が折に觸れて出た。乙州の新宅に宿りて春を待つた時に「人に家を買はせて我は年忘」といつた。この句の云ふ所にも此の誇が見える。私思ふにこの米五升の句も此の誇であると。わしの庵も新年ぢや、大瓢に米が一杯にある、なんと善い景氣では無いか、と云のが此の句意であらうと思ふ。「新年ふくべ」とは一つの造語であらう。この造語に何の妙味あるかは私に解らぬ。又「年立つや」といつて直に「新年」といふ所は餘り拙であると思ふ。この句は本によつては、「年立つや新年ふるき米五升」とある、これでは愈解らなくなる。矢張り「新年ふくべ」の方が正しであらう。

空の名殘惜しまむと舊友の來りて酒興しけるに元日の晝まで臥して曙見はづして

二日にもぬかりはせじな花の春

貞享四年の大晦日に芭蕉は郷里伊賀に在つて舊友と會して忘年の宴を張つた。皆々酔ひつぶれて寢てしまひ、見むとして居た元日の曙の空も見ず晝頃になつてやつと目がさめ、芭蕉欠伸一つして、さてあたりを心をつけ、こりや仕舞うたもう晝ちや、と思つたが、なに強ひて後悔することも無いと云心になつて吟じ出でたのがこの句である。元日は大に手ぬかりをして仕舞つたが、二日にはぬからぬぞ、明日こそは早く起きて曙を見るぞ、なかに明日だつて花の春ちや無いか、と斯う云意味である。この「二日にもぬかりはせじな」一寸讀むと、今日もぬかりはしなかつた、二日にもぬかりはしないぞ、と云意に聞えるが左うでは無い。前書の意を知つて句を讀むと、左うでは無い「二日にも、ぬかりはせじな」では無うて、「二日にもぬかりは、せじ

な」である。即ち今日はぬかつたが、明日もぬかる、と云ことは決してしないと斯う云意と取れる。この後者の解き方の方がまづ當つて居るやうであるが、まだ違ふ。赤草紙に翁の言として「此テニハは、二日には、と云を、にも、としたるなり、にはと云てはあまり平目にあたりて聞きなしいやし」とある。赤草紙は信すべき書である。これによつて見れば、「二日にも」はただ「二日には」と云つてよい所を、あまり散文的に響き、韻の乏しきを厭うて「にも」と柔めたのである。「も」の字に目を注ぎ過ぎるとすこし間違になる。斯う云用語の例は他にもある。

湖頭の無名庵に春を迎ふ時三日閉口題四日

大津繪の筆のはじめは何佛

東海道線下り汽車馬場驛を發し美しき湖水大津市を右に見て、やがて逢坂山の隧道に入る。こゝを出ると間も無く大谷驛である。汽車山科に向つて大谷驛を發すると、君は直に軌道の左下に大谷の古びた人家が立並ぶのを見るであらう。元祿頃大津繪の佛畫を賣る家が連なつて居たのは此邊である。鬼の念佛、藤娘などの一種の略戲畫なる大津繪は今も大津で賣つてる龜末な洋紙本や繪端書に其の俤を残して居るが、元祿頃には斯う云ふ戲繪よりは佛繪の方が主であつた。即ちここに挿むものの類であつた。略筆の勢に一種の風韻がある。表具がしてあるやうに見えるが墨でワクなどを書いたので、唯一枚の紙であつて軸は細い竹である。黄土、丹、綠青、朱墨などでアツサリ彩つてある。この句は大津繪の筆始めには何佛を書くのであらうと云つたのである。もとより何佛を筆始にするといふ格式などは無からう、その無か

るべき格式を問うて見たところが一種のトボケで、斯う云一種のトボケは佛の一種であるのだ。素朴なる大津繪の佛像、まことに芭蕉の好きさうなもの



である。芭蕉の趣味の現はれてる句だ。私はこの句に特に「題四日」としてあるのが故ありげに思ふ。想像を恣にして見ると、正月三日間だけは佛

繪店は遠慮して四日に至つて始めて店を開くなどいふことでもあつたのであらうか。さすれば前書の如く三日間句無く、四日に大津繪を見て忽ちこの句成ると云事になる。しかしこれは唯想像である。

菫蕪に今日は賣り勝つ若菜かな

七種の日の吟であらう。今日は七種で若菜がよく賣れる、菫蕪よりもよく賣れる、と云までのことである。若菜賣りと云名があるから若菜専門の行商があつたであらう。菫蕪専門の行商もある。今東京でもタマには見かける。若菜といふ所謂雅なものゝ菫蕪といふ平民的なものとを競はせた所に少しの趣はある。けふは若菜が景氣がよい、何物よりもよく賣れると云のに、特に菫蕪をもつて來たのは、芭蕉は菫蕪が大好きであつたからである。芭蕉の

欠

# 欠

行かれた。序に叡山の堂社を拜みめぐり給ふ。山法師共これを見て、和尚に何か書いて貰はうと思ひ、各紙硯を持ち来て頼んだ。一休はからかひ氣味に読みにくい文句ばかり書いてそれ／＼與へた。すると、いくら能書でもこんな讀めぬ字では仕方が無い、又あまり文句がどれも短か過ぎて妙で無い、と云者があつて、改めて和尚に揮毫を頼んだ。それからが面白い所であつて、其の文章も一休咄全篇中の最面白い所である。即ち次の如し。

「いかにも大文字を長々と書てたべ、讀み難きはありても詮無し、いかにも讀み易き事を頼み奉ると、一山ともに望まれければ、一休のたまひけるは、紙筆は候か。なか／＼、古へ大師のあそばしける七八尺の大筆あり、紙は何程もつぎ申すべしと申されければ、さらば紙をつがせ給へ、御望の通りながながと大文字を書きて、よく讀めるを仕るべし、急ぎ紙をつがせ給へ、とあ

りしかば、何程なりと紙は御望み次第とて、ひたもの長くつぐ程に、叡山の金堂の前より、戸津坂本の人家まで、長々しくも紙をつぎければ、さらば筆を染めむとて、墨たつふりと含ませて、へたと紙へ書きつけて、一散駈けて、不動坂まで一筋に引かれて、読めるか法師達、とのたまへば、否何とも読めずといふ。又墨をつぎて、不動坂より坂本まで一筋に走り引きて、読めるか読めるかと喚き給へば、一山の法師達肝を潰し、否何とも読めず、といへば、これは「いろは」の「あさき」の條りにある「し」の字なり。なが／＼と書きて読め易きは是なりと宣へば、皆人興をさまし、さても聞及びしよりおどけ人哉と一度にとつと笑ひて興じけるとなり。今の世までもその「し」の字、叡山の寶物となりて有りけるとなり。山法師達も望みし事なれば、いやといはれぬ御作意と、皆感じけるとなり。」

如何にも名文では無いか。「讀めるか／＼とをめき給へば、あたりの文勢は實に非凡なものである。」

さて句に戻る。芭蕉はこの話を踏へて、霞を「しを引捨てし」と云つたのである。さうで無いと云ひたいけれども、「大日枝や」と特に云つて「しを引捨てし」と云つたのであるから、この一休の故事から製り上げた句なることは動かされぬ。故事から着想しても、別に景情の新しみを捕へたなら、それでも善いのである。この句はどうであらうかと云と、比叡山にしの字なりに一抹の霞がかつて居る、と云景色は、それだけの景色として面白みはあるであらう。しかしこの一休の故事を知つてからこの句に對すると實に興味索然となる。句中の面白い形容たる「しを引捨てし」も創意で無いことが解つて仕舞ふ。芭蕉が目前この霞の景を見て、はしなく彼の故事を思ひ起して、句に



したと云のなら猶可なり。實景を見たので無くして故事の知識のみに依つてこの句を成したのなら、詰らぬと云はねばならぬ。どうもこの句は後者の方では無からうかと思はれる。これは延寶六年に出た江戸廣小路と云集に少し語がかはつて出て居る。この年は芭蕉が古池の吟に明確に寂の國を發見した時より八年も前、宗因に始めて會つた前年である。まだ盲獺みの時代の作と見なすことが出来る。當時の作としては他人のに比しては善い方かも知れぬ。

鶯や餅に糞する縁のさき

有名な句である。放膽なうちに一種の優雅を含んだ句である。春日暖なる縁先に餅が干してある、あたりに人が居ない、静な晝である、鶯が来た、チヨコ／＼と餅の上を歩む、やがて小さな糞を餅にしかけた。斯う云所である。

餅の上に糞をしたなどは悪感だと云人も解らぬ人だ。鶯の糞は糞とはいへど感じが宜い、化粧用にもする、など、懸命に鶯の糞より快感を起させようと辯護する人も解らぬ人だ。快感でも悪感でもそんなことはどうでも宜い。要するに、鶯が餅の上に糞をしたと云事は面白みのある事では無いか。斯う云事實を見たなら、誰も併感を動かされるでは無いか。兎も角たとへ鶯といへ、餅に糞したと云ひ放つた所は放膽で小氣味が宜い。一種の豪宕である。そしてこの小さな鶯が、かう云不遠慮なことをすることが、如何にも其あたりの静かさを思はせる。この静がこの句の素を成して居る。そして鶯や、餅や優雅にして、久方の光のどけき流の優雅とは全く種類を異にして居る。芭蕉は此句を杉風の許におくつた手紙に「日比工夫の所にて御座候」と書添へてある。満足の作たること明らかし。

鶯や柳のうしろ藪の前

佳句である。や、柳のうしろで鶯が啼いた。や、藪の前でも啼いた、と云興感である。其境が見えるやうで嬉しい。

柳のうしろにあたり、而して藪の前にあたる一地点、即ち柳と藪との間で鶯が啼いた、と云風に解するのは悪い。一羽の鶯が柳のうしろで啼き、今度は藪の前に移つて啼いたと取るのも可くない。あそこでも此處でも啼いてると云風に解するが最も中つて居る。

梅が香にのつと日の出る山路かな

有名な句である。山路を行く。梅が香が盛んにする、と思ふ、と朝日がヒ

欠

# 欠

子良館の後に梅ありといへば

## 御子良子の一もとゆかし梅の花

先づ御子良子とは何のことかと云と、これは伊勢大神宮の神饌を奉進する役の少女の稱である。神主の女の未だ月の穢無きものをこれに當てる。八歳頃から勤めるのであるが、月の穢を見ると直ちに下る。十一二歳でもう穢れる者もある、これは神慮にかなはぬ者と云はれる。二十歳時には三十歳頃までも穢れぬ者もある、これは神慮にかなうた者と云はれる。又近親に不幸があつた際にも直ぐ下る。だから神主の女で穢れぬ者の無い場合には止むなく男の子を用ひた事もあるが、これは例外の事と云つて宜い。古くは子良、子良の子、と區別があつたらしいが、芭蕉の頃には子良、子良子は、同じもの

である。普通これを御子良子と呼び、或は訛つて御はら子とも呼んで居た。御子良子又大物忌とも稱す。内宮にも外宮にもあつて、其の詰めて居る所を子良館と呼ぶ。

芭蕉の紀行文「笈の小文」に貞享五年の春伊勢に詣でたことが書いてある。そこに、

神垣の内に梅一本もなし、如何に故ある事にやと神司などに尋ね侍れば、只何とはなし、おのづから梅一もとも無くて、子良の館の後に一もと侍るよし語り傳ふ

とあつて其次にこの句が出て居る。大廟の梅と云やうなことを想像して歩いて見ると、さて一向に梅が無い、これは變だ、何かわけがあるのかと、あれでなか／＼研究好きな芭蕉が神司などに尋ねて見ると、別に理由はありませ

ん。偶然です、しかしたしか一本子良館のうしろの方にあつた筈です、と答へる。御子良子、何ものにも穢されざる清淨無垢の少女の居る子良館、そこだけに只一本梅が咲いてる。斯う思つた刹那にこの句が出来たのである。その梅を見て作つたのでは勿論無い。

「ゆかし」と云言を今多くの人は上品と云つたやうな意に誤つてゐる。まだ接せざる者に、接したいと思ふ心を表はした語である。玉だれのうちがゆかしい、と云へば、玉だれのうちの様子が見たいと云こと、佛蘭西ゆかし、と云へば、佛蘭西と云國はどんな國だか早く行つて見たいと云ことである。

「御子良子の一もとゆかし」は初めから語々解剖して説いてはいけない。これだけで、御子良子の所にあるたつた一本、それが見たい、と云ことであるそれに「梅の花」と續ければ、梅の花よ、御子良子の所になつた一本あるさ

うだが、其の所其の花如何にも趣がある、見たいなあ、と云意になる。

この「一もと」と云のが「梅の花」に結ばずして、「御子良子」に結びついてるやうに見えるので、御子良子の清さを梅を譬へたのだ、と云説を吐く人もあるが、如何に比喩でも御子良子を一本二本と數へるのは可笑しい。子良館のうしろにある梅がゆかしい、と云のなら、普通の云ひ方なら、「子良の館の一もとゆかし」と云べきところであるが、それを「御子良子の」としたのは、其時の芭蕉の感興の問題である。即ちその一本の梅を、子良館と云建物に附屬したものと感じないで、御子良子と云清い少女に附屬したものと感じたのである。これはこの方が自然である。私でも御子良子の梅と云ふ風に感じたい云ひたい。この心理状態に目をつければ、「御子良子の」の「の」の字はわけなく解釋がつく、と私は思ふ。兎も角この句はいひまはしがちと無理だと思ふ。

ふ。

餞乙州東武行

梅若菜鞠子の宿のとり汁

これは元禄三年か四年の春の吟である。この頃芭蕉は江州に居た。幻住庵に居たり、木曾塚の無名庵に居たりして居た。芭蕉の門人に乙州と云のがある。この人は大津の驛長だつたと云ふ。この乙州がこの頃江戸へ行くことになつた。芭蕉は旅先ながら暫く江州に居るから、彼の餞別の句として詠じたのがこの句である。

鞠子は駿河の驛で薯蕷汁が名物である。湘夕と云俳人が「とん／＼と路次をたゝいて爐開き知らせに來たが留守にぞありける」ととろ／＼するを句の

上に置いて狂歌を詠んだこともある。膝栗毛にも、例の兩人茶屋に入つてとろ、汁を注文すると、主人夫婦が喧嘩をおつ始め、果てはとろ、の播鉢をおつぱり出して、夫婦も仲裁に來た向うの内儀もこれに迂ると云滑稽が出てゐる。鞠子のとろ、は大に文藝の材料になつて居る。

さて句の意は、乙州よ、お前これから東海道を下るなら、春若きこの頃、趣味豊富だよ、梅も咲いて居る、若菜も美しい、鞠子のとろ、汁も丁度うまい時分だよ、と云のだ。梅若菜鞠子の宿のとろ、汁、どうもたまらぬうま味のある句だ。首春の東海道が少しも無理無く一句に收められて居る。梅、必ずしも俳で無い。若菜、必ずしも俳で無い。そこへとろ、汁が來て列ぶ、ここに於て俳氣忽然として天に朝す。面白いものだ。山姥の謠に「佛法あれば世法あり、煩惱あれば菩提あり、佛あれば衆生あり、衆生あれば山姥もあり」

とある。芭蕉と信章との連句に、信章の短句に「人足あれば山姥もあり」と云のがある。「衆生あれば山姥もあり」では俳で無い、人足が平氣な顔して山姥と列んでる所で俳諧になる。丁度この呼吸と梅若菜而して薯蕷汁の呼吸と同じである。といつた所で、この句の妙味は梅と若菜にとろ、汁が列んでると云だけの所にあると云のでは決して無い。この句の妙味は東海道の面白みが氣持よく出て居る所にある。餞別の句だと云と、必ず達者で行けとか、別れが惜しいとか云のは凡の凡なるものだ。そんなことは一口も云はず、君、東海道は面白よ、と云つた所が如何にも嬉しいでは無いか。

網代民部の息に逢うて

梅の木になほやどり木や梅の花

網代民部とは伊勢の神職足代弘氏のことである。この弘氏は談林の俳人である。又その息も雪堂と號して俳人である。俳人の子に又俳人があるといふ趣を、梅の木に又梅の木が寄生した、と比喻したのである。一向はやたわいも無い句である。

唯この「梅の木」に「梅の花」と重ねた所が、意あつての興で無いかと思はれる。と云のは、歴代滑稽傳に、

伊勢足代弘氏は神職の人なり、談林の時上手の名あり。

郭公聞きは聞いたが郭公

寝るても夏さむるても夏

百韻の附味句作り宗因に等し。

とある。弘氏のこの發句脇が可なり人口に膾炙して居たので、芭蕉がその調

を戯れに真似て、梅の木梅の花と重ねたのでは無からうか。雪堂に會つたのに、其の父の調を真似るとは變なやうだが、それは弘氏の方が名の聞えた人であるので、子よりも父を中心として感じて、斯う云真似をしたのであらう。

### 菟蓐のさし身も少し梅の花

先づは細く寒く面白さうな句である。句の意にはさして不審も起らぬが、これの前書が二いろあるのが解らぬ。即ち「小文庫」には、この句の前書に「いかなる事にやありけむ去來子へつかはすと有」とある。芭蕉翁發句集にはこの句の前書に「去來のもとへなき人の事などいひ遣すとて」とある。小文庫は芭蕉門人史邦の元祿九年に編したもの、發句集は蝶夢の安永三年に編したものである。發句集は年代は遅れて居るけれども蝶夢は堂々たる俳學者

である。共に信ずるに足る。私は芭蕉がこの句の前書を普通の場合には小文庫の如く書いてゐたが、手びかへか何かに發句集の如く書いてあつたのでは無いかと思ふ。なき人のこと云々とあるのを見れば、芭蕉も去來も知つてゐる。人でこの頃死んだ人のことを回想していろ／＼云つてやつたのであらう。いかなる事にやありけん云々と云ふのは、時日を経てから、これはどう云ふ場合の句だつたと云ふ事を忘れたのか、然らずんば記憶して居ながら、それを公表したくないわけがあつて故意に曖昧に書いたのである。事にもよるが、亡人のことに關した句を、いかなる事にやと忘れることは無い。どうしても故意に曖昧に書いたものと思はれる。亡人が誰かと云ふに、それは解らぬ。去來の妹の千子だらうとの説もあるが、確證は無からう。たい要するに、亡き人を回想した折に出來た句と云ふだけは明である。

菟蓐の刺身はよく佛事の馳走に出るもので、菟蓐のゆでたのを薄く切つて酢味噌などをつけて食ふのである。梅の咲いてる頃、まだ小寒い頃、菟蓐の刺身を少し食つてゐると云ふ句意である。この句意に亡人を弔ふ意味は決して無い。併し菟蓐の刺身そのものに十分の佛味があり、又「少し」と云ふところ、折からの梅花と配して、其景情に、濕つた、沈んだ、果敢なさ、が浮いて居る。こゝが妙所である。悲しいとも何ともいはず、黙々として少量の菟蓐刺身に箸をつけて居る芭蕉の姿、それを歴々と去來は見得たであらう。我々も見得るのである。亡人を世を憚つてひそかに偲んで居るとすれば、猶更感が深い。

菟蓐が芭蕉の好物であつた事は前にも云つた。折柄の食膳の實際を描いたのであらう。



旅鳥古巢は梅になりけり

或年の春郷里の伊賀で吟じた句だといふ。旅鳥が久しぶりで古巢へ歸つて來たら、古巢のあたりは梅が盛りで、おもしろい春になつてたと云つたのだ。旅鳥と云ふのは他郷から來た人を輕侮する語に用ひられて居る。鳥は一日のうちでも可なり遠方へ行く、日の暮方になつて大まごつきになつて、最寄の木枝にでも一泊せうとすると、其土地の鳥が寄つて集つて追ひはらふ、かう云ふ事をよく目撃する。この觀察から旅鳥と云ふ語が生れ出たのであらう。昔の人の細かい觀察が言語に残つて居るのを見て、少なからぬ趣味を感じる事がよくある。あいつは旅鳥だ、と云ふ罵辭には、不容な汚れた疲れた落着かない様が、十分に見えて面白い。

この面白い語を、芭蕉は自分に對して使つて、自分を罵つた。伊賀の梅花

に逢つて嬉しいやうな淋しいやうな感があるのを、さら／＼と云ひ放つた句である。一向平淡に云ひ去つてあるが、裏にこの淋しいやうな感がよく動いて居る。

園女亭

暖簾の奥物床し北の梅

園女伊勢に在る頃、芭蕉が其の住居を訪うた時の句である。暖簾とは軒にかけわたす、切目の多い、丈の短いものを普通いふが、又切目の無い幅も廣く、丈は軒から地に至る布帛の帳も、やはり暖簾である。是等は多く商家の店先の、まづは日のあたるやうな所に在るのであるが、又此外に家の中の部屋と部屋との界の隅の方などに垂れてあるのも矢張り暖簾といふ。私は此句

にある暖簾はこの家の中のもの云ふのであらうと思ふ。北の梅と云ふのは北の方にある梅とより外に意味の取りやうは無い、比喻のやうに解する説もあるが、よし比喻であつても、北の梅と云ふこの字のおもての意味は北の方に在る梅で無くてはならぬ。園女の家は南向きであつて、とある部屋界に暖簾が用ひてある、そして其の暖簾のむかうの方に庭が見えて、そこに梅などが見える。しかし暖簾のむかうの部屋も、庭の様も、暖簾に隔てられてよくは見えず、唯庭に梅あることのみ解る。斯う云ふ趣を其儘寫したのであらう。北の梅と云ふのは人の妻たるところを喩へたのだと云ふ説があるが、私は取りたくない。

門人何某陸奥に下るを馬のはなむけして

忘るなよ藪の中なる梅の花

これこそ比喻だ。自分を藪の中に見る人も無く咲いて居る梅の花に喩へたのである。送別の時が梅の季節であつたことは勿論である。お前遠方へ行つても俺のことを忘れて呉れるなと云ふ意。芭蕉庵の傍に實際に藪があつて、そこに梅が咲いてるのを見て、それによそへたのかも知れぬ。この句の上五字は或は「又も訪へ」とした本もある。前書も芭蕉が旅中知己になつた行脚僧が道の序に芭蕉庵を訪うて呉れた時の句と云ふ趣になつてゐるものもある。この前書にしても、句はやはり其客僧の立ち際に出來た、やはり送別の時の吟と見るべきである。

防川亭

香を探る梅に家見る軒端かな

防川と云ふ尾張の門人の家で、見たる儘を吟じた句である。梅の香がする、ハテどこに咲いてるのであらうと、縁側に立つて見渡すと、近所の家がいろいろ見えると、斯う云ふ景情であらう。梅あるあたりの家々なれば俗ならぬ建物で、それに芭蕉が心を引かれたのである。さてその時梅そのものは目に觸れたか觸れぬかと云ふに、私は梅は物陰になつて居て見えす、唯家のみ見える、と云ふ風に解したいと思ふ。

子供等よ梅折り残せ牛の策

里梅と云ふ前書のある真蹟があつて、それには「子供等よ」が「里の子よ」となつてると云ふことである。五文字の相違は孰方でもよいが、兎も角田舎

欠

# 欠

梅が香に昔の一字あはれなり

新八と云ふ者の一周忌の節、新八の父なる梅丸と云ふ人のところへ送つた手紙のうちに書いた句である。新八殿の亡くなられたは丁度去年の今頃、梅の咲いてる頃であつた。もう一年たつた、あゝ新八殿は昔の人になつて仕舞はれた。昔は新八殿とこれ／＼の話もしたことがあつたなど、何につけ昔と云ふことをいはねばならぬ。故人この「故」の字を使はねばならぬのが悲しい、と云ふのである。この句中には必ずしも一周忌と云ふことを聞かせる語は入つて居ない。

紅梅や見ぬ戀作る玉すだれ

芭蕉が京都に行つて御所の中を通つた時に、ひどく其優麗の光景に動かさ

れたことが、松風に與へた手紙に見えて居る。「まことに〜此世の極樂といふは外にはあらず御所の事なり、此四五日已前上京候て御所中を通りければ折節雨降りて心静かにいと有難く、殿々の紅梅今を盛りと見えし、音楽の音、扱も〜そらに涙を流して通り侍りける」とあつてこの句がある。

玉だれは玉簾で、簾の美稱である。紅梅の盛なるあたり、簾の垂れた御殿が列なつて居る、その簾の中には美しい女官達の居られることであらうと、見ぬ戀にあこがれる、と云ふ趣である。芭蕉の句としては珍しく濃艶な句である。しかし簾が垂れてゐて女の姿を見ない趣はやはり芭蕉である。此句、芭蕉自らが見ぬ戀に浮かされた、と必ずしも解せずとも、誰かあの玉簾に對して見ぬ戀に浮かれるものがあるだらう、と云ふ風に觀たものと解して可い。「作る」と云ふ語が可なり重い語である。あそこあたりで見ぬ戀が発生する、

と云つた語勢である。

凍解けて筆に汲干す清水かな

これは吉野山の西行の舊跡の「苔清水」を吟じた句である。西行が暫く吉野に庵を結んで居た、其のそばに清水の落ち溜る所がある、これを使用して居た、こゝにこの西行の歌に「とく〜と落つる岩間の苔清水汲み干す程も無き住居かな」と云ふのがある。とく〜は水の滴る音、苔むす岩間の凹に清水が湧き落ちて少しづつ溜つてゐる、その少量の水を汲み干すことも無く、いつもその中の少しづつ使つて事が足りる、我が住居の簡單さよ、と云ふ意である。この句はこの歌を踏まへたものである。凍解は冬中凍て氷つて居たのが春光に逢つて解けることを云ふので、句の季題になつてゐる。苔清

水に來て見れば、凍りついて居たのが丁度解け始めて居る。解けてゐても、ほんの少ししか水が無い。昔慕しさに、その水を筆に含めて矢立か何かで物を書いてると、直き水が無くなつて了つたと云ふのである。西行は「汲み干す程もなき」と云つたが、俺は筆で汲み干して了つた、と云ふ所もある。清水が西行の昔より更に細くなつたやうな意も見える、凍解の時故に更に水が少いと云ふ意も見える。一寸面白い句だと私は思ふ。理窟ぼいと云ふ人があるかも知れないけれど。

初午に狐の剃りし頭かな

其角に仕へて居た下男で、句も作る是吉と云ふのがあつた。これは戸籍上の名では無い、其角は下男を雇ふ毎にいつも是吉と云ふ名にしておいた。これ

欠

# 欠

## 春雨の木下にかゝる雫かな

この句は吉野行脚中の句である。

木下は木下闇など云ふから「こした」と訓むことも出来る。左すればこの句は、春雨が煙の如く降つて居る、霧の如く降つて居る、たい濡れるだけで水滴を受けぬが、木立の下へ来ると、この煙霧の如き雨が葉や枝に溜つて粒になつてポト／＼と落ちて来る、あの趣を描いたのである。

木下は木下川なども云つて、「木の根」と訓むことも出来る。かうすればこの句は、春雨が滴りを成して木の根もとへ落ちる、と云ふ風に解かれる。

この句は「春雨の木下につたふ雫かな」として出てゐる書もある。これならば木の根の方になると、梢の雨の露が筋を引いて根元へ傳つて落ちる、と

云ふ風に解いて明かになる。

又一書には「苔清水」と云ふ題があつて、「春雨の木下につたふ清水哉」となつてゐる。苔清水は前に云つた西行の遺址である。かうして見れば、木の根と云ふ風に訓んで、春雨が木の根に傳つて落ちる所そこに清水が湛へてゐる光景になる。

傘に押し分け見たる柳かな

春雨が降つてゐる。柳が地に著かむばかりに繁く盛に垂れて居る。それを避けて通らないで、わざと傘で柳の枝を押分けて通つて見た、パサ／＼と音がする、露が散る、緑が紛亂する、興が湧く。  
面白い句である。この柳の中へ傘さして突入すると云ふ心持は、彼のた

つと云ふ女の「あの中へまろびて見たき青田かな」の趣に似て居る。柳が垂れてゐる、そこに突入する、青田が彩つたやうに美しく滑らかに見える、そこに轉がつて見たいと思ふ、自然に酔うて狂ふ俳人の一面である。

傘で柳を押分けて見て、どこが面白い、と云ふ人は伶俐な人である。伶俐な爲に得る所が無論多いであらうが、その人は稚氣の面白味を知らないで一生済ます人である。

柳が自ら傘に觸れたと云ふなら可いが、わざ／＼「押し分け見たる」は厭味だ、人工的だ、といきまく人は詩を解して居ながら、その詩の一種なる俳の味を嘗めて見ない人である。

八九間空で雨降る柳かな



この句は有名な句であるが、云ひ方が如何にもボンヤリして居て不明瞭な句である。しかし一葉集にはこの句の前書に「春の雨いと静に降りて頓て霽れたる頃近きあたりなる柳見に行きけるに春光きよらかなる中に滴りいまだをやみなければ」とある。この前書によればわけなく解せられる。即ち、八九間は柳の梢の高さを云ふ。春雨が霽れて、柳の緑に露珠を聯ねて日に光りつゝポト／＼と落ちる。それを八九間の空から雨が降つてゐると云つたのである。或人は風に柳の亂れて雨の露迸り散る様だと云ふが、成程そんな景色も想像はされるけれども、句のおもていも、又前書でも、風は表はしてない。

前書を離しては實に意味の取れない句である。かう云ふのは佳句と云ふことは出来ぬと思ふ。

腫物に觸はる柳のしなへ哉

「しなへ」と云ふのは、しなふ即ちしなやかに撓む事をいふので、しなふと云ふ動詞の名詞法である。だから正しくはしなひと云ふべきであるが、それを方言に訛つてしなへと云ふのである。何だかしなひと云ふよりもしなへと云ふ方がしなやかさうに聞える気がする。

柳のしなやかに揺れる様子が、如何にもソウツとして、俗にいふ腫物にさはると云ふやうな様子である、と云ふのである。

去來がこの句に就いて「柳の直にさはりたるなり」といひ、又「比喩にしては誰も云はむ、直にさはるとは如何にか及ばむ」とも云つて居る。この言は一寸聞くと、實際に腫物に柳がさはつた事を云つたのだ、と云ふやうに解

されるが、さうでは無く、云ひ直せば、腫物にさはる如き柳のしなへと云ふやうな云ひ方は誰も遣るが直に「さはる柳の」と云うた云表はし方の強みが芭蕉の芭蕉たる所である、と云ふ意を強く且つ深玄に感じて云つたのである。

鶯を魂に眠るか嬌柳

「たをやなぎ」とは多分芭蕉の造語であらう。句選年考の一本の書入に、この語は「たをやか」の「や」を柳にかけたのであらう、とある。多分左うであらう。要するにたをやかなる柳と云ふことで、特に優麗な感を起させる語である。

風無く春光萬象を酔はすやうに充ちて居る頃、柳がそよともせず垂れて居る。そのあたりに鶯が啼いてゐる。其の様を、柳が眠つてゐる、あの啼

いてる鶯は、柳の魂が抜けて遊んでるのだらう、と云つたのである。莊周の胡蝶の事はもとより、人が寝てる間に其の魂が何かになつて遊びまはる、と云ふやうな話がよくある、其の想像を以てこの柳と鶯とを見たのである。

作つた句ではあるが、作りに熱中した虚栗時代の句であるから仕方が無い作り句の中では佳い句だと私は思ふ。

敷へ來ぬ屋敷屋敷の梅柳

一字幽蘭集には「緩歩」と云ふ前書が附けてある。成程この句は緩歩の景情である。春の日和に浮かれて何處と云ふあても無くふらりと歩き歩く。店の並んだ町で無く、静な屋敷町を歩いて居る。塚越しに梅の白き紅き、柳

の縁なる、春は到るところに句つて居る。「數へ來ぬ」は梅が何本あつた、柳が何本あつたと數へて來たと云ふことには違ひないが、必ずしも其意で無く、梅や柳を幾本も送迎したと云ふ心持を顯した語としたい。ゆつたりとした景ゆつたりとした情がよく表はれてゐて、面白い句である。

梅柳さぞ若衆かな女かな

梅は咲き盛つて居る。柳は青みわたつて居る。春色は天下に満ちて居る。嗚かし今頃は若衆の艶色殊に優れて居ることであらう、女の艶色殊に優れて居ることであらうとの意。自然の春色を見渡して、人間の春色を想ひやつたのである。悠々洋々として面白い句だと思ふ。

この句は有名な句である。語の使ひざまからも、哉が二つ使つてあると云

ふ特色があるので、よく例句に引かれる句だ。そして扱句意は、と訊くと、解つてゐるぢや無いか、かう嘸若衆である哉、女である哉と云ふ心持さ、などと云ふ。こんなことばかり云ふ先生が多いから、俳句と云ふものは解りにくいものと誤解されるのだ。

梅を若衆に譬へ、柳を女に譬へたと云ふ解き方が普通のやうであるが、これは中つて居ない。梅柳をひつくるめて、若衆女に譬へたと云ふのも中つて居ない。それでは、面白くも何とも無いし、第一「さぞ」と云ふ語を一體どうする積りだ。馬琴はこの「さぞ」を「さも」としなくては不可ぬ、と云つたさうだ。自分で誤解しておいて、その誤解通りに、原物を直さうとは、これ程亂暴なことはありはしない。ところが學者と云ふ一種の生物、及びこの生物の血を受けてる者は昔も今もよくこれをして居る。馬琴などは無論この生物

中の者だ。學者中の大學者本居宣長先生なども盛にこれを遣つてゐる。先生は近頃新しく云はれた自然主義の論と同じことを、とつきの昔に論じて、藝術の意義を定めてゐる。その所は頗る學者ばなれがして居るやうであるが、文藝を解釋するとなると、悪い血のせいで右の暴行を敢てやる。私は源氏物語を精讀するに際して、宣長が師の真淵の説を駁して、自説を主張して居るのに逢着する毎に、その態度は實に堂々乎たるものだが、よく／＼其の説を味ふと、多くの場合、真淵の説の方が中つてゐるのを感じた。これは真淵より宣長の方が學者に深入りした害であらう。そして今の學者はなほこの事を猛烈に臆面なく遣つて居る。諸の大學は莫大の資本をおろして、この有害無益なる學者を年々製り出しつゝあるのだ。眞に文藝を愛する人々は、甲冑に身を堅めて、この學者の來襲を防禦して居なくてはならぬ。

諸君、文藝を眞に知らむとする諸君、泥棒に留守番を頼むとも 學者の説を信仰してはなりませんぞ。

芭蕉は若衆も知つてた、女も知つてた。肉の色、肉の香の愛すべきを知つてた。この句ある所以である。

竹冷先生編の芭蕉句集講義を見たが、この句に就ての解釋は、菱花子の説が最も近く思はれた。

鶯の笠落したる椿かな

鶯がそちこち飛びまはつてゐる、折しも椿がポタリと落ちた、其の椿を、あの鶯が笠を落したな、と見立てた。

椿が落ちてゐる、これはこのごろ鳴き飛ぶ鶯の落した笠であらう、と見立て

た。

この兩解どちらでも宜い。要するに椿の落つる、或は落ちて居る椿を、見て、鶯の落した笠と見たのである。

鶯が花を笠にすると云ふ美しい想は古くある。古今集に「青柳をかた糸によりて鶯の縫ふてふ笠は梅の花笠」と云ふ歌、「鶯の笠に縫ふてふ梅の花折りてかざさむ老かくるや」と云ふ歌等が、記載された最も古いものであらう。青柳の歌は催馬樂にも謡はれて居る。梅を笠にすると云ふことになつてゐる。「梅の花笠」と云ふ成語も出来て居る。

芭蕉は因襲に捕はれない。椿を鶯の笠にして仕舞つたのである。落したと云ふ新しい所を捕へた、その爲に落ちるを特色とする椿の花が無理でなく鶯の笠にし得られて居る。

うち寄りて花入さぐれ梅椿

句兄弟に出てゐる歌仙の發句である。前書に「壬申十二月廿日即興」とある。この發句について、彫棠、晋子、黄山、桃隣、銀杏の附句があつて、つまり六吟の歌仙になつて居る。そしてこの句の脇は「降りこむまゝの初雪の宿」と云彫棠の句である。斯う云ふことを知つて置いてからで無くては解し難い。

花いけのことを尾張から近江あたりへかけて、花入と云ふ。伊賀邊でも無論左う云ふので芭蕉が國言葉を出したので、この花入も花いけ即ち花瓶のことである。

彫棠晋子等が芭蕉の所へ寄つたのか、或は芭蕉もお客の一人であつたかは

わからぬが、兎に角會衆の者が十二月の末のこととて梅や椿を持つて來た。さてこれは珍しい早速活けたいものだが、花瓶はどこに入れてあつたらう、さア皆で花瓶を探し出さう、と芭蕉が興に乗つたその刹那の心持を云つたのであらう。即興とある邊からまづこんなことがあつて、それを其儘句にしたものだらうと思はれる。

十二月の吟を春の部に入れておくはかしいが、それは唯便宜上芭蕉句選の順序通りにやるまでのことだ。

陽炎の我が肩にある紙子かな

「我が肩に立つ」となつて居る本もある。「立つ」でも無論わかるが、「ある」は頗るをつた。私の嗜好でいへば「立つ」よりは「ある」にしたい。芭蕉はどち

らを云つたものか、或はどちらかを先に云つて、あとでどちらかに直したものか、斯う云ことはよくある。意味には大した違は無い。

紙子着て日向ぼつこして居る。紙子が暖まつて、よい心持になる。ふと見れば、チロ／＼チロ／＼と我が肩に陽炎が立つてる、と云のである。私はこの句は自分の影法師を見て作つた句では無いかと思ふ。暖い日に背を向けて我が影に對して居ると、影の輪廓が、陽炎に揺れて見える。陽炎は水蒸氣多量に上騰し直に微細なる水滴に變じ、光線これに反射して閃耀の状が見えるそれに名づけたのである。

肩のみで無く、袖からもどこからも陽炎がのぼるのであるが、肩が最も著く見えるから、それで云はゞ代表せしめたのである。

紙子着てると、陽炎はおれの肩のところにあるわい、と云興である。「立

つしなら肩のところ立つてゐるわい、である。同じやうなことであるが、肩のところにあるわい、の方がとぼけて無邪氣で面白いと思ふ。

紙子と云もの、實物を私はまだ見たことが無いが、紙をつぎ合はせて中へ綿を入れた着物であることは事實だ。わびたものである。私の祖父が寒くなると、紙製の綿入のチヨツキ見たいなものを着て居たことを記憶して居る。あれも紙子の一種であるのだ。紙が燃れてけば立つて、ぬくぬくと暖かさうに見えるものであつた。

普通の着物より紙子の方が陽炎が著しく見えるかどうか、それは知らぬが、このぬくぬくした、そしてわびた所に陽炎が別の趣を成してゐるを覺える。

### 陽炎や柴胡の原のうす曇り

柴胡は藥草である。柴胡が生えて居る原に、春の日長閑過ぎてうすうす曇つて居る、陽炎が立つてゐる、と云ふ景である。面白さうな句である。私は面白さうとより云ことは出来ぬ。だつて私は柴胡と云ものを知らないですもの。薬に刻んだ柴胡は見たことはあるが、自然に生えて居る所未だ見たことが無いから、この句の景色が頭に判然と浮んで來ない。讀者諸君に御存じの方はいくらもあらう。柴胡と云もの、趣味を教へて下さい。

後に鵜澤四丁氏から、柴胡の原と云のは横濱に近い所の地名で、そこに柴胡が澤山生えて居たのだ、と云ことを教へられた。

### 丈六の陽炎高し石の上

小文庫に芭蕉の伊賀新大佛之記と云文があつてその奥にこの句がある。ど

うしてもこの文を擧げねばならぬ。伊賀の國阿波の庄に新大佛といふあり。此所は奈良の都東大寺の聖俊乗上人の舊跡なり。今年舊里に年を越えて、舊友宗七宗無ひとりふたり誘ひものして、彼の地に到るに、仁王門鐘樓の跡は枯れたる草の葉に隠れて、松ものいは事とはむ、石すゑばかり董のみして、といひけむも、斯るけしきに似たらむ、尙分け入るに、蓮華臺獅子の座なんどは、まだ苔のあとを殘せり。御佛はしりへなる岩窟にたゝまれて霜に朽ち苔に埋れて、はつかに見えさせ給ふ。御頭ばかりは未だ恙もなく、上人の御影をあがめ置きたる草堂のかたはらに安置したり、誠にこゝらの人の力を費し、上人の貴願いたづらに成り侍る事も悲しく、泪も落ちて、談も無く空しき石臺にぬかづきて」と云のがその全文で、この句の前書になつて居る。この文は不明な書き方がしてあるので、一讀直に解ると云わけには行かぬ。

兎も角俊乗上人がこゝに大佛堂を建立したが、それが荒廢して仕舞て居ると云ことはわかる。さて「蓮華臺獅子の座は、苔のあとを殘す」とある。苔のあとと云ことが不分明であるが、佛像の下にある蓮華臺などが苔むして其の形はやつとわかる位になつてると云のだらう。「御佛は云々たゝまれて」とある。このたゝまれてが解らぬ。まづ佛座のうしろに岩窟があつて、そこへ押遣られて居ると云のらしい。佛像が邪魔にされて、背後の岩窟を幸ひ、そこへ押籠めてあると云のだらう。なほ思ふに「たゝまれて」と云語から推すと、或は手も離れ、腹も割れ、と云工合に、めちや／＼に壞れたのを、岩窟の中へ積込んである、のでは無からうか、すると「御ぐしばかりは未だ恙もなく」と云句が生きて来る。胴はめちや／＼になつて居るが、頭部ばかりは完全保存されて、これは別に草堂のそばに首さらしのやうに安置されて居る、



と云のらしい。「空しき石臺」と云のは、前の蓮華臺獅子の座を指したものであらう。斯うざつと解釋して見ると、大佛の胴體は岩窟中に押籠められて首だけ別に安置してある。そしてこの大佛の坐して居た臺は空しく露はに残つてる、と云光景になる。

芭蕉はこの石臺にぬかづき、心にこの臺の上へ大佛の坐して居た昔の光景を描いて見た。

丈六は一丈六尺の略語、釋迦の像は一丈六尺に作ると云制になつてるから、丈六と云へば即ち大佛と云と同じである。

時は春で、このむなしき石の上に陽炎がキラ／＼立騰つてゐる。その陽炎の高く騰るのを、心持で見一丈六尺立騰つてゐる、と云つたのである。佛像滅びて唯高く立つ陽炎がそれに代つて居ると云感慨である。

「丈六に」と書いてある本もある。句選にも斯うして出してある。「に」であると一寸はつきりしなくなる。三冊子に次のことが出て居る。

丈六の陽炎高し石の上

陽炎に倣つくれ石の上

此句當國大佛の句なり。人にも吟じ聞かせて、自らも再吟有て、丈六の方に定るなり。

三冊子は信すべき書である。これで見るとこの兩句どちらにしようかと芭蕉が迷つたのである。「倣作れ」の方は、芭蕉の感じが明らかに顯はれて居るが、句だけ離して見ると、一體何のおもかげを作れと云のか解らなくなる。それで「丈六の」の方にして置いたのであらう。しかし「陽炎に」の句は「丈六」の句の解釋に便宜を與へて居る。「丈六に」ではどうも工合が悪い。しかし丈

六」と云つて「高し」と云のもあまり巧な方で無い。要するにこの句は云ひ方が拙い、唯句の心持は莊重縹渺の趣がある。そこは十分に價値がある。

かれ芝やまだ陽炎の一二寸

芝生が黄いろく枯れた儘で居る。もう春にはなつて居る。しかも春はまだ浅く、時々風が寒く吹く。枯芝に陽炎がもえてゐる。しかし蒸さるゝやうに悠々とのぼる季候にはまだ間がある。ほんの一二寸もえて居るばかりである。細い句である。そして又小さい句である。しばらく黙然として地上を凝視して居る芭蕉の姿が見えるやうな句である。寂しきも十分ある。この句を誦すると、ほのかに暖みを感じる、そしてほのかに寒さを感じる。その時の芭蕉の感じ通りの感じが我等の肌にも覺えるのである。

「書には「やゝ陽炎の」とあるが、私は「やゝ」では下の「一二寸」と云切つたのにそぐはぬと思ふ。やはり「まだ」で無くてはいけぬ。

花の雲鐘は上野か浅草か

有名な句である。濃い春の氣に包まれて心がポーとなるやうな句である。斯う書いて來るうち、私の家の内が森閑として居るのに氣がつく。寒の翌日珍しく暖い日曜で、家のうちには誰も居らぬ。窓硝子が時々風にゴト、ゴトと鳴る。お隣の坊ちやんが例の巧にハーモニカを吹くのが遠く聞える。森閑として居るのが著しく身にしてみる。回想をせねばならぬ心持になる。

唐詩選の五言絶句の諳誦がすつかり出来るやうになつて、御褒美に北齋の繪の入つた唐詩選をいたいた頃、父に連れられて本願寺の櫻を見に行つた

そこにあるのは糸垂櫻ばかりで、淡赤い花が、父の肩に觸れるばかり。私等が其木蔭に行つた頃はもう暮れかゝつて居た。鐘が鳴る。花の雲鐘は上野か浅草か、と父が徐ろに誦した。その時私はもとより句の意が解らう筈は無かつたが、その後も父は花を見る毎にこの句を誦したので、いつと無く、私はこの句を解した。解した積りで居た。花盛りの下を歩いてゐる、あたりに花見る人がちらほら見える、春に酔うたやうな心持である、夕方、ポーと鐘が聞えて来る、あれは上野の鐘か、浅草の鐘か、わからぬ、唯斯うポーと聞える、心持も唯斯うポーとする。かう云工合に私は解して居た。

この解し方は近いけれども誤であつた。

この句の前書には「草庵」とある。草庵とは深川の芭蕉庵のことである。貞享元年の春、芭蕉がその庵の縁側に立つて遠望してゐる。芭蕉庵は「橋あ

り、舟あり、林あり、塔あり、花の雲鐘は上野か浅草かと、眼前の奇景を捨て難く」と枯尾花の序に見える如く、眺望が潤い。江戸の春は櫻に富む。遠近に櫻が白く雪のやうに叢がつてゐる。鐘の音がする。あれは上野の鐘であらうか、浅草の鐘であらうか。唯斯うポーと聞える、心持も唯斯うポーとする。これが正當の解である。ポーとする邊は幼い時の解き方と同じであるが花の雲と云つたのは、身其の雲中に在るにあらずして、花の雲を遠望して居るのである。こゝが幼い時の誤であつたのだ。彼の父に始めてこの句を聞いた時は我が身花の下にあつたと云偶然の事の爲に、長く誤つたのである。斯う云事がよくあるものである。

又この鐘を入相の鐘と思ひ込んで居たのも狭かつた。花の雲を遠望するのであるから、晝間に違ない。夕方としても、遠くが見えぬ程暗くなつた頃で

は無い。

鐘がどこの鐘か判然せぬ、と云藤臈趣がこの句の生命であつて、この趣が、春の特色たる人を酔はすやうな、頭をぼんやりさせるやうな趣を顯はして居るのである。

自ら花の下にあるので無くて、唯遠望したと云ふところが、私の幼き頃の解し方よりも、更に面白く、且つ芭蕉らしく思へる。

「草庵」と云前書が無くても、一體「花の雲」と云語が、すでに遠望を意味して居るのである。

吉野にて

花盛り山は日頃の朝ぼらけ

吉野山に花を見た頃の吟である。これは芭蕉の句で無からうと云説もあるが、この句柄はどうしても芭蕉に相違無い。

「日頃の」は「いつもの」と同じである。吉野山、今や櫻のまつ盛りである。さてひろく高く見渡せば、山の曙のけしき、空の色、雲のたゞすまひ、朝の露のありさま、いつもと同じである。と云のである。

花盛りを賞しながら、眼を花盛り内にもみ置かず、花盛り以外へも眼を配つた所に、この句の妙味がある。こんなことは芭蕉で無くては出来ぬ。

花は盛りだが、山は日頃の朝ぼらけで一向詰らぬ、と物足らぬやうに云つた譯では決して無い。これを繪で云と、花の咲いてる所のみを描かず、花より外の山のけしき、空の様をも描いた、と斯う思へば、よくこの句が解る筈である。

葛城のふもとを過る

なほ見たし花に明け行く神の顔

貞享五年に大和の國を行脚して葛城山の麓を通つた。折から春深く、殊にあけぼの頃で、花の色霞のほひ面白きに、興湧いてこの句が成つたのである。

昔役、行者が葛城山と吉野山との間に岩橋を架すると云大工事を企て、神を使役したが、其折葛城の神は形の醜きを耻ぢて、夜しか工事に随はなかつたので、行者が怒つてこれを罰したと云傳説がある。葛城の神は顔の醜いと云事畫を忌むと云事によつて有名になつて神様である。

この句は、斯うして葛城の花の曙を見ると、葛城の神が花の間になほ在つ

て、夜が明けかゝる、美しい花の中に、醜い神の顔、晝になつて了へばお隠れになるが、まだ夜明頃だから、神はまだ隠れずに御出でにならう。どんなお顔だらう。昔から見えないことにしてあるが、やはり好奇心が動いて見たい氣がする、と云のである。

たゞ神の顔を見たいにはあらず、美しい花の中なる醜い神の顔と云ことに趣味を動かしたのである。「なほ見たし」の「なほ」は「やはり」であるが、この「やはり」の意は「花」に強く關係して居る、花に……を想像すると、やはり見たくなる、と云のである。

唐崎の松は花より臙にて

琵琶湖畔の春色を、夜の唐崎の松に認めた。唐崎の一つ松、枝は縦に空に

朝し、横に湖上にも伸びてゐる。朧夜、これを見れば、松は唯朧々として煙の如く、搖ぎ去らむとして去らざる光景、花の朧なるよりは、又別の趣がある。花は白い、松は黒い、白きの朧なるよりは、黒きの朧なるが、朧の程度が強い。そこを賞したのである。

普通の云ひ方にするに「花より朧かな」とあるべきであるが、これを「朧にて」と云つたのは、芭蕉の自然の聲である。自然の聲には動かす可からざる理由がある。花より朧かな、と云つては、花より朧であるなア、と唯朧と云其事のみを賞したことになる。それでは感が十分其儘には出切らぬのである。春月の花の唐崎の松、あゝ縹渺たる哉、まづ花よりも更に朧であつてそれから、と斯うなほ何やらいろ／＼云ひたいのを云ひおほせず、譬へば美人を人に説かむとして、著しき點を述べなほ他のいろ／＼の美點をいはむとし

てどう云はうかと煩つて云ひ得ぬが如く、愛子を亡つて後、その子の事を人に説かむとして、悲に勝たれて、總て云ひおほせ得ざるが如き態度である。

更に云へば、云ひおほせざる部分には、松そのもの以外、まはりの湖水の櫻をも含んで居るであらう。

この句の形が奇なので、發句とは見えず、寧ろ連句の三句目のやうにも見えるので、其の當時も、批難したり不審したりした人があつた。成程發句には切字が無くてはならぬと云風に垣を結びめぐらしてしまへば、この句はまさしく垣の外のものになる、こゝが面白いところである。或人がこの句に切字が無いのは變ではありませんかと、其角に云つた。其角はこれに自分の解釋だけを説いて返事した。何と云つて返事したのか、それは傳はつて居ないから解らぬが、兎に角安んじた返事は出來ず、ちと自分も怪しかつたかして、

芭蕉にこの句の事を尋ねた。芭蕉のその時の答は實に永世不朽千古不磨古今東西を問はず達人必ず到るの境地を示して居る。曰く、「我は切字の有無と意の淺深を案じて作したる句にあらず、唯眼前の實景盡きなせども及ばず、毛髪これが爲に動き、覺えずこの句をなす、工みたる事なき故、句意と切字とは我これを知らず」斯くせむの私意なく自ら斯くなつた句であるから、切字やなんかは知らない、と云たのである。規則、約束、因襲、そんな者に捕はれてゐて、眞の詩、文、一切の藝術は出来ない。唯我感じ、感じたる儘を其儘、唯其儘文字とする。それが眞の詩人である、藝術家である、偉人である。さきに我が『俳味』で「我を啓發せしめたる句」と云題で文を募つた時、氏家關邨子が、この句及びこの言に啓發された旨を記したのは、實に會心のことであつた。「句意と切字とは我これを知らず」斯く云ひ得る境に躍り込む時よ

り其人は始めて眞の人となり得るのである。

上野の花見にまかり侍りしに人々幕打ち騒ぎ物の音小唄の聲様々なりける側の松蔭を頼みて

四五器の揃はぬ花見ごころ哉

先づこの四五器と云ものを説明せねばならぬが、まだ判然と解らぬ。五器は炭俵には假名で書いてある。「ごき」の「ご」は供御の御で、「き」は器か或は筒の轉かも知れない、と云事と、御器と云語は食器の汎稱として用ひられた、と云事とを露伴先生に教へられた。佛家殊に禪僧は、各自必ず一組になつた食器を有つて常にこれを用ひて居る。私が名古屋の護國院を訪うた時この食器を見せて貰つたが、あの托鉢僧の手にして居る大きな鉢の外に汁椀にする

ものや菜をいれる小皿にするものや大小の器都合五つあつて、これがうまく入れ子になつて、總てが大鉢の中へ藏されるやうになつてゐる。なほ附屬品として、箸、匙子、サバ取り、水板と、下敷にする漆紙とがあつて、一切皆漆器である。行脚の際にはこれ等を皆頭陀に一纏めにして入れて携へるのである。句選年考に、「今世俗五器と書く、佛家に用ふる所の器五あればなるべし」とある。大鉢は正式の時に用ふるもの故行脚の時にはこれを持たず他の五つの椀だけを持つたもので、偶然この数が五つであるところから、食器の汎稱なる「ごき」を五器と佛家で書き始めたものであらうか。又句選年考に曰く「又遍參僧などは手輕きをよしとして、五を省きて四有るを携ふ、是句に云へる所の四五器なり」とある。更に省いて四つ一組にして用の足りるやうにしたものがあつたと見える。僧ならぬ俳諧人の行脚などにはこの略式の四五器を

携へたものと見える。私はこの四五器の稱ある一組の物を見たいと思つて居るが、まだ志を遂げぬ。又「黒器」と書いて「ごき」と詠ませてある例もあるこれも食器で黒塗の漆椀で蓋のある物である。(彼の佛家の鉢椀も皆黒塗である)「ごき」と云語にこの黒いと云ふことから黒器の字を當てたものであらう。又抹茶々椀の一種に吳器形と云のがある。吳の字は又五とも書く。これにまた大徳寺五器、紅葉五器等の品種がある。形が飯盛の器に似てるから、五器と稱するとのことである。句選年考に「五器は本字吳器なり、吳の國より出でたる故に其名とす」とあるが、吳五黒等の文字に拘泥せず「ごき」は「御器」で食器を云語だとしておくが正しい。

説く所枝に枝が岐れて、肝心の四五器と云のが不明であるが、これはなほ諸君の教を乞ふことにして、爰には前陳の如く、僧の携帶食器の略式なもの



で、四つを一組にしたものと云ふこととしておく。

この句は俗を離れて、不足に満足したやうな、そしていくらか寂しいやうな、物足らぬ感もある、さう云ふ心持を歌つたのである。

携帯食器の四五器、それが既に詫びたものである。我が携ふるのはそれが完全に揃つて居ない。(四つあるべき椀が三つしか無いとか、或は箸がピッコであるとか)更に一層わびしい。外の人は花に浮かれて騒ぎ立てゝゐる。我は松蔭に不揃の四五器を取出し、獨り食を取つて花を見て居る。この心持よと云放つたのである。

大和國草尾村にて

花の陰謠に似たる旅寝かな

花の陰に暫しの宿りをする。さて斯うして居たところは、一寸謠にありさうな風情だ。我は謠曲中の人物であるやうな心持がすると云つたのである。旅僧が花の陰に宿る、夜更けて昔の名高い人の幽霊が顯はれる、と云やうなことがよく謠にある。

蕉風以前の發句によく謠の文句を使つたのがある。芭蕉以後にもたまにはある。謠は俳諧の源氏なり、と云ふ語があるのは、これはもとより發句のみならず連句を籠めて云つたので、連句發句に謠の文句を使ふ其の趣は、丁度國學者が文に源氏の文句を挿む趣に似て居ると云ふ意味であらう。

この句は文句を取るなどと云ふ末に遊ばず、謠其のものゝ概括した印象を捕へたのである。

伊賀の國花垣の庄はそのかみ奈良の八重櫻の料に附けられけるといひ傳へ侍れば

一里は皆花守の子孫かや

一條天皇の后上東門院が、奈良興福寺の名木たる八重櫻を御所内へ移植せむと遊ばされた。すると興福寺の僧達は、たとひ尊命とは申せ我寺の靈木を如何で手離さむやと憤つた。其の優なる心を后も感じ給ひて伊賀の國余野の庄をこの櫻保護の料に寄附せられ、其れ以來毎年花の時は垣をめぐらし、余野の里人をして七日間宿直させられる事になり、この木を決して他へ移すな又剪るなどの仰せが下つた。それ故に余野の庄を花垣の庄と呼ぶやうになつた。この櫻はもとこの余野の庄から献じたものである。斯う云話が傳はつて

居る。花垣の庄は今の名賀郡花垣村のことで、上野の町から二里もあらうか月ヶ瀬へ行く途に通る所である。

芭蕉歸國の折にでも、このあたりを通つて、この由來を思出し、さればこころに耕す者、遊ぶ兒たちも、皆祖先は花守即ち花の番人であつたのか。この一里の人間は優美な花守の子孫ばかりであるのかなア。と嬉しく趣味を感じたのである。

檀の木の花にかまはぬ姿かな

野ざらし紀行に、三井秋風が鳴瀧の山家を訪ふとあつて、更に梅林と記して次に、前に出した「梅白し昨日や鶴を盗まれし」の句があつて、其れと並んでこの句が出て居る。曠野には花の句を澤山列べた末に、「ある人の山家に至

りて」と前書してこの句が置いてある。この「ある人」は無論秋風を指したものである。「梅白し」の句と同時に詠んだものに違ない。梅が美しく咲揃つて居る一方に檀の木が蠹々として居る。恰も美人の中に剛骨の壯漢が突立つてる感がある。芭蕉は梅のみに目を注がす此の檀の木にも興を催して、どんな花があたりに咲いても、そんなことには一向頓着なしに蠹々と立つて居るわい、と云つたのである。この「花」を梅を指すと解するのは狭い。成程句の出来た時は梅の時ではあるけれどもこの句の上では唯春のどんな花にも、と云意である。曠野の句の置き方でもその意が見えてる。

紙衣の濡るとも折らむ雨の花

伊勢の路草後に乙孝と云つた人の許へ芭蕉が訪れた時の句である。花盛の

頃であつた。折節雨が降つて居た。面白くてたまらぬ。興に乗じて花を折らうとする。ナニこの紙衣が濡れたつて構はぬさと、えらい元氣である。

カミコは又カミギヌとも云つた。

花に降る雨には濡れても構はぬと云想はよく和歌にある。東山の花盛りの折俄に雨が降つて人々狼狽の際、實方の中將は平然として花のかげに佇み、「櫻狩り雨は降り來ぬ同じくは濡るとも花の陰にやどらむ」と歌つた、と云有名な話もある。ちと芝居氣が勝ち過ぎて厭味だが、兎も角其の折喝采を博したことと見える。斯う云想を俳諧的に、紙衣が濡れても、と云つて表はしたのである。詰らぬ句であるが、芭蕉が餘程興に入つた様子が見えて居る。

観音の夢見やりつ花の雲

深川の庵から浅草を遠望しての句である。観音堂の甍を遙に見やる。そのあたりには花の雲が棚引いてゐる。と云だけの句である。この句の前書に諸曲西行櫻の一節「毘沙門堂の花盛四王天の築花もこれにはいかでまさるべき上なる黒谷下河原むかし遍昭僧正のうき世を厭ひし花頂山鷺のみ山の花の色枯れにし鶴の林まで思ひ知られてあはれなり」を置いた書がある。芭蕉上機嫌の折の戯であらう。但しこの前書の爲にこの句を清水観音の句だと解する説もあるが、前書はたゞ花の縁で、殊に佛味ある花を聯ねた文句だから、こゝへ置いて、句の趣を助けたゞけのものである。

花を宿にはじめ終りや二十日ほど

この句に「瓢竹庵に膝をいれて旅の思ひいと安かりければ」と云前書がある

書がある。この瓢竹庵とは伊賀上野の五庵の一である。芭蕉が宿つたり俳諧したりした庵の址が五つある、を云のである。歸省の折この庵にお客になつて花時を過ごしたの見える。瓢竹庵のあたりには花がある。これを絶えず見て居た。まるで花を宿としたやうなもの。そしてその宿りやうも永くて、丁度花の初めから終りまで宿つて居て、花のあらゆる趣を見盡した。即ち廿日ほどになつた。と斯う云句意である。苔みて七日、咲きそめて七日、散りそめて七日、と云ふのが花の普通の見時と云はれて居る。三七廿一である。即ち廿日ほどと云のにあたる。餘り面白い句でも無い。唯言ひ方の無造作な所に一種の妙味がある。

淋しさや花のあたりの翌檜

よい句である。身にしみ〜とよい句である。但しこの句を知るには、必ず先づ翌檜と云植物を知らなくてはならぬ。これを知らずしては到底この句の趣味を悟ることが出来ぬ。斯く申す拙者もながこの植物を知らずに暮した。六七年前小栗風葉君と共に日光へ遊んだ。上り上つて湯元の里へ入らうとする、あの神秘的な湯の湖の岸の徑を通る時、「君この木を知つてるか」と君が云つた。見ると、檜の小さい弱いやうな、木が並んでる。深山らしい趣があつて、そして其の弱々しい、梢のあたりポーと煙のやうに見える工合に、何とも云へぬ淋しみがある。「知らない」と私は云つた。「翌檜さ」と君は叱るやうに云つた。私はこの時始めてこの句の妙味を味ひ得た。その後東京の自分の宿の近くの家にも翌檜のあるのを發見した。

山の中である。櫻が咲いて居る。其の櫻の近くに翌檜が弱々しい翠を垂れ

て居る。寂として居る。この花のあたりに翌檜がある、と云一團の景が「淋しさや」である。花は賑やかだが、そばの翌檜は淋しいと云意味では決して無い。

笈の小文には「日は花に暮れて淋しや翌檜」となつて居る。初め斯う作つたものであらう。同書を見るとこの句が山中の即吟であることが解る。

翌檜とは面白い名である。いかにも檜の出来かけと云風情のある木で、明日あたりは檜に成らう、と思はれる木である。そこで誰の戯れか「明日成らう」と附けたのである。

枕の草紙にこの木のことがある。この書には「あすはひのき」となつて居る。名の意は同じである。この書に曰く、「木はあすはひの木、此世近くも見え聞えず、御嶽にまうで、歸る人などのいと手ふれにくげに荒々しけれど、

何の心ありてかあすは檜とつけむ、あぢきなきかねごとなりや、云々とあ  
る。

この句の前書に「あすは檜木とかや谷の老木のいへることあり、きのふは  
夢と過ぎて翌は未だ來らず、只生前一樽の樂しみの外に、あすはくといひ  
くらし、終に賢者の讒を受けぬ」とある書がある。この前書は翌檜そのも  
のに托して、稍述懐めいたことを云つたのであるが、この爲にこの句をも  
主觀の句と見るのは誤である。句は客觀で、目前の景を見て、その淋しみを  
歌つたゞけのことである。

四方より花吹き入れて鳩の海

芭蕉が江州の門人濱田珍碩の許へ行つた時、湖水の春景の面白さに洒落堂

の記といふ一文とこの句が出来たのである。其の全文を芭蕉翁文集から引く。

洒落堂の記

山は静にして性を養ひ、水は動いて情を慰む。靜動二の間にして住家を  
得る者あり。濱田氏珍夕といへり。目に佳境を盡し、口に風雅を唱へて、  
濁りをすまし塵を洗ふが故に洒落堂といふ。門に戒幡を懸けて、分別の門  
内に入る事を許さず、と書けり。彼の宗鑑が客に教ふるざれ歌に一等加へ  
てをかし。且つ夫れ簡にして方丈なるもの二間、休紹二子の佗をつぎて、  
しかも其ののりを見ず。木を植ゑ石を並べて假のたはふれとなす。抑おも  
の、浦は勢多唐崎を左右の袖の如くし、湖を抱て三上山に向ふ。湖は琵琶  
の形に似たれば、松の響波をしらぶ、日枝の山比良の高根を斜に見て、音  
羽石山を肩の邊りになん置けり、長等の花を髪にかざして、鏡山は月をよ

そふ。淡粧濃抹の日々に變れるが如し。心匠の風雲も又是に慣ふなるべし。

四方より花吹入て鴉の海

とある。珍碩は珍夕とも書いたものと見える。酒堂と云號もある人だ。門に「分別の門内に入る事を許さず」と書き出したのは面白いでは無いか。分別心のある奴は来るな、或はこゝへ来て分別めいた話をしてはならぬぞ、と云のだ。米價を説いたり、處世法を云々したり、親分子分の心得を論じたりする奴は入れないと云のだ。人となり既に斯くの如き珍碩が、又非常に好風景な所に家を構へて居る。「抑おものゝ浦は」と書いた所を見れば、洒落堂はおものゝ浦の岸にあつたものと見える。おものゝ浦又はおものゝ濱と云ふ。おものは陪膳と書いて、膳所の舊名である。あのあたりは湖水の南方の灣の底になつて居て、西に唐崎を望み、東に近く勢多がある。そして正面に(東北方)黒い三

上山が見える。北西に比良山聳え、西に日枝即ち比叡山、その南にこれはすつと近く長等山が在る。山城國境の音羽山、及びつい近くの石山はこれを背後にして居る。顔を湖に向けて居ると、丁度右肩のうしろに石山、左肩のうしろに音羽山があることになる。どこを見ても名所だらけである。そして時は今花盛りである。このあたりに花が多く見える。一體近江は昔から櫻でうたはれて居る。比良、音羽などの花もうたはれて居るが、これは遠くで花を見ることは出来ぬが、あそこらあたりに花が咲いてるであらうと、想像して望むことが出来る。長等の花も有名なもので、今も長等公園のあたりには花が多い。斯う云風に湖水のまはり方々に花がある。琵琶湖へは四方から花が吹き込むことぢや。と斯う云つたのである。目前に花の湖に散り込むを見て詠んだのかも知れぬが、さうしたところが其の目前の散る花はこの句の動機

を成したただけで、句は想像の句と見るを中れりとする。上手な句とは思はれぬが、爽快な心持がよく出て居ると思ふ。花吹き入れて、鴉の海が出来たとか何とか云のでは無い。鴉の海四方より花吹入れて、と云と同じことで、吹入れて、それからどうしました、と聞くのは、唐崎の松は花より靡にて、それからどうしました、と聞くと同じだ。落語野晒に出る臆病者ちやあるまいし、かう云句にそれから聞くものちやありません。吹入れて、と云さして餘情を含んだ云ひ方である。君が戀人に逢ふ時、まアいゝさ、戀人があると假定し給へ。其の戀人が、君の顔を見て莞爾として「わたし、嬉しい」と云つた場合と、「わたし、嬉しくつて」と云つた場合と、比較して見給へ。「嬉しい」ちや、「へえ左うですか」と云ひたくなる。嬉しくつて」と云はれて、始めてこちらもゾツともしようと云もの。この「嬉しくつて」は云ひさしで、この

下へは何が来るか解らない。云つた當人にも解らない。これを文法學者と云物に聞くと、必ず「この下に、仕方がありません、が略してあるのだ」などと云。中れるが如くにして中つて居ない。唯云ひさして、餘情を含んだのである。云ひさしの妙味はこゝにあるのである。

鴉の海は琵琶湖のことで、鴉と云鳥がこの湖に澤山居ると云特色を捕へて「には鳥の近江の海」と云やうに歌つたことが古事記以來見えて居る。後これを「鴉の海」と約めて琵琶湖の稱に用ふるやうになつたのである。

芭蕉の眞蹟に、「にはの波」と書いたのがあると云事が年考に見えるが、にはの波は造語過ぎて居るし、又それを許した所が、花吹入れて…波、と云のはちと新古今流纖細で芭蕉風では無い。「にはの海」とコセくしない潤い語で無くてはこゝに据らぬ。この所謂眞蹟は怪しいものである。



花咲いて七日鶴見る麓かな

この句を「鶴下りて七日花見る麓かな」とした本があるが、これは宜くない。これではまるで御伽話だ。羽州尾花澤の鈴木清風と云俳人が、江戸から京へかけて諸大家を歴訪し所々で催した俳諧が十卷になつたのを、出版したのが「一つ橋」と云書である。この書の巻頭にこの句が出て居る。「三月二十日即興」と云前書で、の句が發句で、芭蕉、清風、舉白、會良、齋、其角、嵐雪と云一連で催した歌仙がある。清風が芭蕉を訪うたに就て、芭蕉が門人等を集めて催したのであらう。この「一つ橋」にチャンと「花咲いて七日鶴見る」とある。

花七日などと云つて、花の開いて居る間は七日と云ことになつて居る。或山の

麓である。山から麓へかけて花が咲亂れて居る。満開の七日の間、この麓のあたりに鶴が来て遊んで居る、と云のである。鶴も花を喜ぶらしいと云感もある。雨六子は北海道で、山櫻の咲いて居る上へ十數羽の鶴が下りて居る事などをよく見受けたと云つて居られるから、鶴が盛に居たこの昔にあつては、芭蕉の旅行中どこかで山、花、鶴と云景を見たので、それを思ひ出してこの句を成したのであらうが、此の句を作つた目的は、清風に對しての挨拶である。丁度花時分清風が江戸に逗留して居るのを鶴が七日間來てゐるとたとへたのである。

東行餞別

此の心推せよ花に五器一具

春の巻

支考が花の頃江戸へ来て、更にこれより東北へ行脚せむとする其別れの際に、芭蕉が詠んで與へた句である。

五器は前にも云つた通り御器で、入れ子になつた携帶用食器である。一具は一揃ひと云こと。汝がこの華やかな花盛りに五器一具で枯淡な旅をする、汝のこの心をよく思つて忘れるな、と云やうに諸註書には書いてあるが、どうも左う云やうに私の頭には這入らない。「此の心」の「此の」と云のが先づ變だ。尤もこれは他人の懐へ入つた云ひ方であるとした所で、「推せよ」に因る。推せよは推量せよ推察せよと解くより仕方があるまいと思ふ。時の方言かとも思ふが、芭蕉等の使つてる方言は、今も我が郷里の邊に生きて居る。併し「推する」と云語が推量推察の外の意味として使はれてる事を未だ聞かぬ。説叢には、「此心しばらくも忘れず、身におし及ぼして慎み、忘却する事勿れ」と

解いて居るが、これは何だか、下調べをして來なかつた先生が、生徒から質問されて、妙に言を多く云つて、その中へ解釋すべき語を無理に組入れて、答へをする。それを聞く感がある。問者の頭を紛糾して兎も角目前の急を遁れようと云卑屈手段である。「身におし及ぼして」は實に無理だと思ふ。

私はやはり「推せよ」を普通の推量推察と取りたい。すると従つて「此の心」は支考自らの心で無くて、芭蕉の心と取りたい。更に従つて五器一具は支考がもとより所持の具で無くて、芭蕉が饒別にこの際與へたものと取りたい。

支考は芭蕉のやうな枯淡な人では無いから、この時の旅行も、乞食坊主のやうな眞似は爲得なかつたであらう。先づ普通の旅行者として江戸まで來たが、或は普通以上に見得を張つて贅澤をしたかも知れない。多分支考のこと

だから左うだつたらう。江戸に逗留中も随分見得を張つて居て、それが芭蕉の目に餘つて、餞別に際し故更に見すばらしい五器一具を彼に與へて、曰く、「今は花時ぢや、世人は皆豪奢を競うて浮かれて居る斯う云折の旅人汝に、我はこの一具の五器を與へるのぢや、どうぢや斯う云餞別をする俺の心を推察して見よ、な、解つたらう」と斯う云つたのであらう。句としての價値は甚だ低いと思ふ。

この稿書き了へて一週間程過ぎて「俳諧問答」に次の文あるを見付けた。「支考云々世を佞ふ生得ありと見えて、翁の餞別に

この心推せよ花に五器一具

と申され、旅五器一具とらされたり。翁は彼が佞なる生得を見届け給へども、彼はこの心を推する能はず云々」

# 欠

# 欠

物皆自得

花はなに遊あそぶ蛇あまな食くらひそ友雀ともすずめ

天地てんちの萬物ばんぶつ皆みな各おの自ら好このむ所ところを爲なして居ゐる。甲かが乙おつを妨またげること等とうは決けつしてしてはいけぬ。と云いことを云いつたのである。蛇あまが花はなに遊あそんで居ゐる。その邊へんに雀すずめが群ぐらつて居ゐる。雀すずめ等らよ汝なんぢら等らはあの蛇あまを食くつてはならぬぞ、蛇あまは蛇あまの爲なす儘ままに任まかせて置おけ、妨またげてはならぬぞ、と戒いましめたのである。友雀ともすずめとは群雀ぐらすずめの意いである。

蝙蝠かうもりも出いでようき世よの花はなに鳥とり

この句くは或僧あるそうが旅立たびだちする時ときに餞別せんべつとして作つくつた句くであつたが、考直かんがへなほしてこ

の句は出さないうつたのだと云。うき世は花に鳥遊ぶこの華やかな時節蝙蝠も出て遊べ、と云つたのである。一般の鳥を俗人に譬へ、變りもの僧を蝙蝠に譬へたのである。一向に詰らぬ句である。

但し花の頃に蝙蝠も出でよと云のは單に空想の註文では無く、實際に於て花の頃の暖か過ぎるやうな晩方蝙蝠が出て舞ふことがある。季節では蝙蝠は夏になつてゐるがもう春から出ることがある。

龍門にて

龍門の花や上戸の土産にせむ

大和國に龍門ヶ嶽と云山がある。そこに龍門の瀧と云がある。そのあたりに花が咲いて居る。飛流直下の瀧のあたりに花を見ると云この光景は、豪

快にして、上戸の好みさうな所である。この花を上戸へみやげに折つて行かうと云ふのであらう。

も少し幼稚な、文字か語の上の洒落かとも思ふが、左う云方の解釋は附かぬ。

酒のみに語らむ斯る瀧の花

これも前の句と同時同處の句である。斯る豪快なる瀧の花の景、これを酒のみに話して遣らうと云ふのであらう。

憂方知ニ酒聖  
貧始覺ニ錢神

花にうき世我が酒白く飯黒し

この前書の妙句は、白氏文集の卷十七にあるのを其儘持つて来たものである。句の意は、花咲くにつけても憂き世なる哉、我は貧にして、酒も下等な白く濁つた酒、飯も下等な黒ずんだもの、こんなものを飲食して居ること哉、と云ふのである。また芭蕉が芭蕉らしくならない頃の作故、若い不平が出て居る。

種芋や花の盛を賣り歩く

秋熟した芋の株についた子芋を、冬凍てぬやうに、穴を掘つて圍つて置いたのが種芋である。これを春になつて出して食ひ、又これを植ゑて芋を作る種芋の稱は植ゑて種にするから呼ぶので、元來はその爲に圍つたものなのが

いつとなく人間の贅澤でこれを食べやうになつたのであらう。今東京で「きぬかつぎ」と稱して皮の儘鹽茹にして花時に食ふ。これ即ち種芋である。種芋を花盛りに賣つて歩く、と云ふことに興を感じた句である。秋のものたる芋を花時に賣歩くと云事に興味を持ったのであらう。「花の盛りを」の「を」は「だのに」の意に近い。

木のもとに汁も膾も櫻かな

これは上野の花見の句だと云ふことである。櫻の散り盛る頃である。花の木の下に居ると、花見の御馳走の汁にも膾にも花が散り込んで何もかも櫻だらけ、と云ふ光景である。

「木のもとに」の「に」が「は」となつて本もある。句の修辭から云と、どう

も「木のもとには」の方が宜いやうである。韻きが陽氣にもなるし、表白もこの方が自然である。「木のもとに」と云と、狭苦しい感じがある。芭蕉は果していづれに作つたかは不明であるが、多くの書には「に」になつて居る。

「汁も膾も櫻かな」の云ひ方が豪放で面白いと思ふ。汁にも膾にも櫻が散ると云はず、汁も膾も櫻ぢや、と云つたのが面白い。いかにも眞白に落花を被つて居る様が目に浮ぶ。この「汁も膾も」を前陳「汁にも膾にも云々」と解したのは便宜上のことであつて、決してこの「も」は「にも」の意では無い。汁そのものも膾そのものも櫻になつちまつた、と云云ひ方である。

春の夜は櫻に明けてしまひけり

春の夜が、もう少し白みかゝるや、明けるなと思つて居る。白むく。見

る間に満開の櫻の白みが天地に亘つて、それが判然と見え出す。到頭春の夜は明けてしまつた。と云ふのである。

櫻の白みに夜の明け方の急なるを感じたのである。いはば、櫻によつて明けた、と云云ひ方である。「明けてしまひけり」と云放つた所に、手の物を取られたやうなハツとした感じがあるが、さて夜の明けたのを惜むと云やうな執着も無い心持がよく現はれて居る。この無執着な心持は、春の夜明の誰もの心持である。

「春の夜は櫻に明けてしまひけり」、ポーと明け來つて、世は再び櫻になつた。この趣の神韻を遺憾無く十七字に盛つて居る。高遠な句で芭蕉の句中でも有数の吟と思ふ。

顔に似ぬ發句も出でよ初櫻

櫻の初めて咲いたのを初櫻といふ。世上の櫻を見歩いて、この木の咲いたのが初めてだ、と云やうな語では無く、要するに、まだ櫻の一般に咲き揃はぬ頃、淡赤き蕾の中に梢頭少しづつ白く開きたるを眼前に見つけたるを、初櫻と云のである。

もう咲きかゝつた、と思ふ心はゾク／＼と風人の胸を浮立たせる。逸興禁せずと云心持になる。この小むづかしい我が顔、見すばらしい我が顔に似合はぬ、バツとした、華やかな、我ながら意外に思ふやうな發句が出るよ、と云のである。「發句も出でよ」と己が作るで無く自ら出るを望んだ所も面白い。

芭蕉はこの句の「顔に似ぬ發句も出でよ」までは出来て、下に「櫻」を置

かうとして、いろんな櫻を置いて見て、やつと「初櫻」で落着いた、と云話が傳はつて居る。

最中の桃の中より初櫻

桃の満開の間から、櫻が咲き初めた光景である。

この「最中の」が「咲亂す」になつてる集もある。どちらでも大した差は無いと思ふ。

扇にて酒酌む影や散る櫻

狂言で、扇をひろげて、酒壺に擬し「ドク／＼／＼／＼」など、口で云つて、酒を注いで遣る形をよくやる。狂言で酒をつぐ時は必ず扇を使ふ。



この句は花散るあたりで酒盛をしてる人が、輿に乗じて狂言の身ぶりして遊んでる所を寫したものであらう。

「影」は人影の意である。さう云人の様子をわざと判然とは云はず、ぼんやりした感じを與へてゐるのが「散る櫻」によく合つて、眩しき落花に隠見して、又大勢の花見の人に隠見して、扇にて酒酌む人の姿が見えるさまが、よく現はれて居ると思ふ。

山櫻瓦葺くもの先づ二つ

「瓦葺くもの」とは寺のことである。これを解するにはどうしても齋宮の忌詞から話さねばならぬ。齋宮とは昔御代の更る毎に、伊勢の神宮と賀茂の神社とに未婚の女王又は内親王の一人を選びて遣はされ、奉仕せしめられる習

はしであつた。この奉仕の方を齋王といひ、齋王の住み給ふ所を齋宮といひ、又音でサイグウとも云つた。神には汚れたこと不吉なことを甚だ忌むと云のが古來の例である。この度大行天皇崩御遊ばされ、臣民悉く喪に服して居る折柄でも、宮中の神祇祭典にあづかる者も國中一般の神官等も職務中喪に服せず、御大喪當夜神社を遙拜所にあてる事すら一時は斷つたと云。斯る訣であるから、この齋宮の如き殊に汚を忌み、不吉な事、佛に關した事などは口で話すことも禁せられてあつた。しかし日常全く左う云事を口にせずして用の足りるわけも無いので、忌詞を定めて、その名ならぬ名を以てそれを指すことにして居た。延喜式齋宮の部に出て居る忌詞には、佛を中子、經を染紙、寺を瓦葺、僧を髮長、死ぬを直る、病むを息む、など云べきことが出て居る。

木下長嘯が東山の麓靈山と云所に幽居した。其様を自ら書いた山家の記と云文が舉白集開卷第一に載つて居る。その文中に、「常に住む所は瓦ふけるもの二つ、函丈二間をば殊にしつらひて、みぎりの上に杜少陵が詩古人の和歌、あはれなるは色紙に書いておしつ」とある。この「瓦ふけるもの」と云語は前の忌詞から造つたものらしい。但しこの文のこの語は寺と云意では無くただ瓦葺きの建物と云ことである。

この句の「瓦ふくもの」は寺とか或は小さくも堂とか云物を指して居る。そして忌詞通り「瓦ふき」としないで「瓦ふくもの」としたのは長嘯子の「瓦ふけるもの」と云云ひ方に倣つたのである。

句の描くところは山路の櫻を仰ぎつゝ登り行くと、堂塔など佛式建物が花の間に先づ二棟見えた。と云ふので、なほ登り行けば其建物もいくつもあら

うと云豫期で「先づ」と置いたのである。

これを吉野に分上つた時藏王堂を見て吟じた句だと云説があるが果して左うであるか確證は無い。「吉野にて」と云前書のある書があるがこの前書を疑ふべき理由がある。又長嘯の古跡たる小鹽山の勝持寺のあたりへ行つた折に作つた句であらう。山家の記の語を使つたのも其ゆかりであらうとの説もあるが、やはり推量である。たゞどこと定めず山櫻の句としておいて句の價値に増減は無い。

櫻狩り奇特や日々に五里六里

貞享五年吉野を跋涉した時の句である。櫻狩は即ち花見である。さて「我ながら奇特なことちや、花を賞せむが爲に毎日々々五里か六里づゝも歩く

と云うたのである。面白くない句ではあるが、私は「奇特や」と云あたりに芭蕉の聲を聞くやうな心持がする。

吉野にて櫻見せうぞ 檜笠

貞享五年の三月の半、芭蕉の弟子でとりわけ芭蕉が好んで居た杜國が伊勢で出會つて一緒に吉野を見ることになつた。さてその伊勢の宿りを出る時、戯れに笠のうらに

乾坤無住同行二人

よし野にて櫻見せうぞ 檜笠

よし野にて我も見せうぞ 檜笠

萬菊丸

と書いた。あとの句は杜國が書添へたので、萬菊丸は即ち杜國が童らしき名

を自ら附けたのである。

我が愛するこの檜笠よ、今に吉野で櫻を見せてやらうぞ、と云つたのである。何でも無いことのやうだが、左も興に乗つた気分も見え、檜笠に物云ふと云所に寂もあつて、面白い。芭蕉獨特の境である。前の「櫻狩」の句もこの年の吉野行きの際である。

檜笠とは檜のへぎ板で造つた笠である。

さまざまの事思ひ出す櫻かな

同年のことであつた、芭蕉が故郷伊賀に立寄り、故主蟬吟の子の藤堂良長俳號を探丸と云人に會つた。探丸は父蟬吟の遺した邸に居たのである。庭の櫻を見るに附け芭蕉は古き事をいろ／＼思ひ出して感慨無量であつた。彼が

遁世の動機は實に蟬吟の死であつた。故郷の山河は依然たり。蟬吟の邸も昔の儘、而して故人の子現に我が前に在る。詩人の胸中想ふべしである。

この下の「櫻」が月や秋の草花などで、因襲的に哀れなものであつたならこの句の感は餘程減る。櫻と云因襲的に華やかなものを、悲哀なる回想の動機と認めた所が感が深い。實際櫻には月などは別な一種の悲哀を人の心に韻かせる所がある。西行は「花見ればそのいはれとは無けれども心のうちぞ苦しかりける」と明らかに櫻の悲哀をうたつて居る。

すらくとして居て、しかも刺戟される句である。所謂まことの心から出た吟である。この句をかく拵者たるは彼の泥ほひあつた。世道を知る心をやかしあふ。

山家

鶴の巢に嵐の外ほかの櫻さくらかな

鶴つるの巢すが見える。そのおたりに櫻さくらが静しづかに咲さいて居る。山懐やまをこのやうな所ところで嵐あらしもあたらす、至極しごく平穩へいあんなる境まかひである。

この「鶴」の字が或書には「鶴」となつて居る。しかしこれは字が似るので誤つたのでは無からうか。一體鶴は屋上又は樹上に巢を營むもの、鶴は沼澤中の小島又は芦株草叢小灌木の茂る所などに巢を營むもので、鶴の樹梢に起立せるを見たものはあるけれども、樹上に坐せるを見たものは無いのである。この句の景を思ふに、高くして目につく鶴の巢の方あたれりと思ふ。

水口にて二十年を経て古人に逢ふ

命二つ中に活たる櫻かな

近江の水口で二十年ぶりに門人土芳に逢つた時の吟である。あゝ二十年ぶりの邂逅、こゝに不思議の感が起る。嬉しさはもとよりである。折から春の盛りでそのあたりに櫻が咲いてる。さう云情景である。

「命二つ」とは土芳の命と我が命とである。命あつて爰に又逢ひ得た。この不思議なる、二人の命よ、と逢つたる嬉しさと共に生命と云深い考に入つた心持をよく現して居る。

「中に」はこの二つの命の間にである。

「活たるは」活きたる」とよむが宜い。爛漫たる花の色、この邂逅に一層の生氣を得て目さむるばかりに見える心持を云つたのである。

非常に生き／＼した句で、驚き、喜び、その瞬間的な感情の間にも、哲理の味を含んだ句である。新し、旧た、

うらやまましうき世の北の山櫻

加賀の卯辰山に居た門人柳陰軒句空へおくつた句である。世の塵を遠く離れ、うき世をはなれた北の國に、君は山櫻を見て居ることであらう、羨しい哉、と云つたのである。

「うき世の北」と云語が器用に出て居る。

「花の故事」と云書に、この句をおくつた時の手紙が出てるのを、句選年考に擧げて居る。年考より寫して示す。

撰集御大望の由近國の發句取集可進候 殘生長途の勞にや冬中一日として心よからずしかし暖氣に成候得ば柳陰庵の假寢に北枝秋の坊風流のあらそひなど思出ししきりにゆかしく一山の花ももはや開き候半と察申候。

### 奈良七重七堂伽藍八重櫻

この句はテニヲハを一字も使つてないので有名な句である。

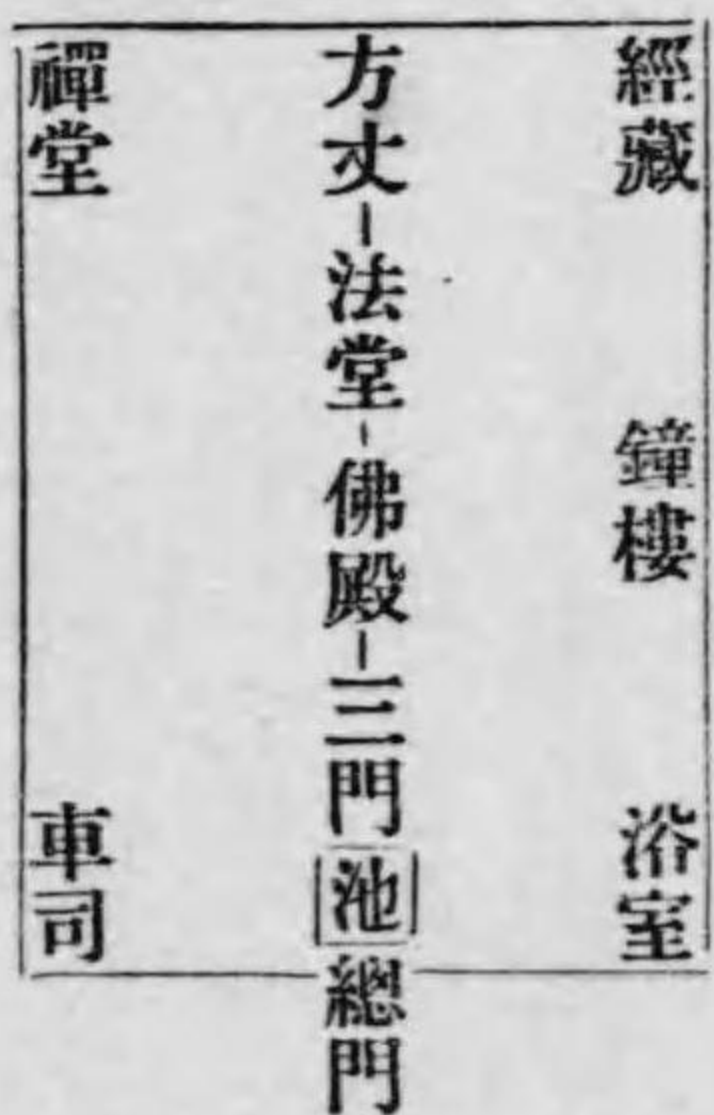
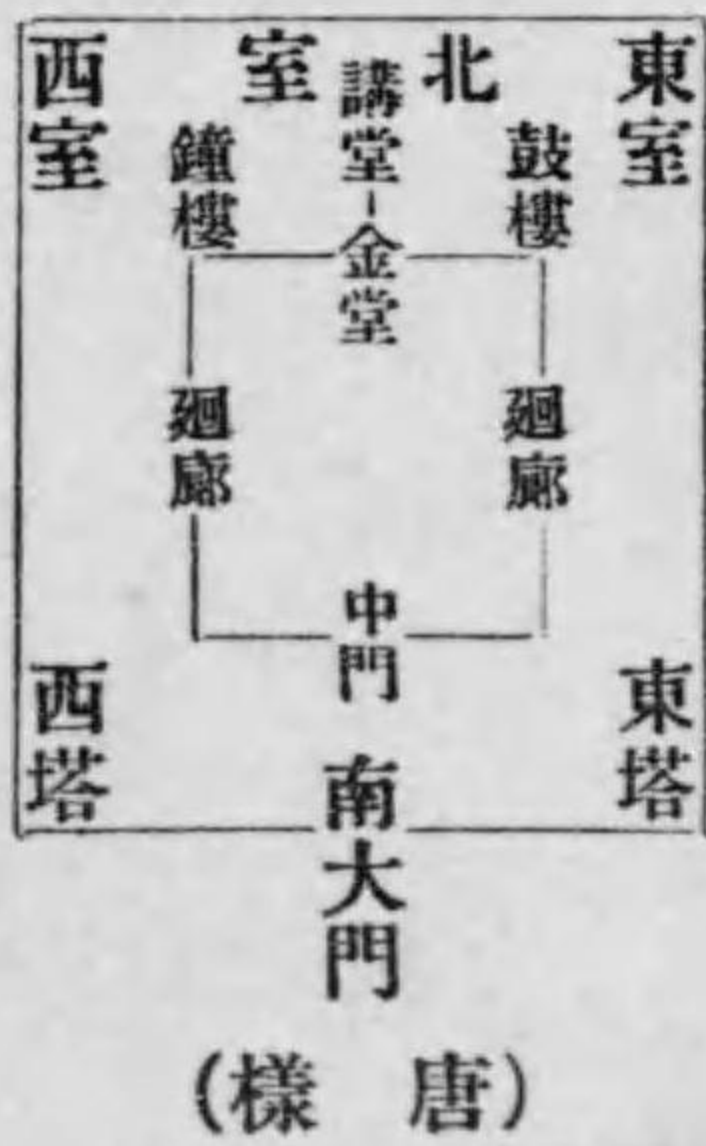
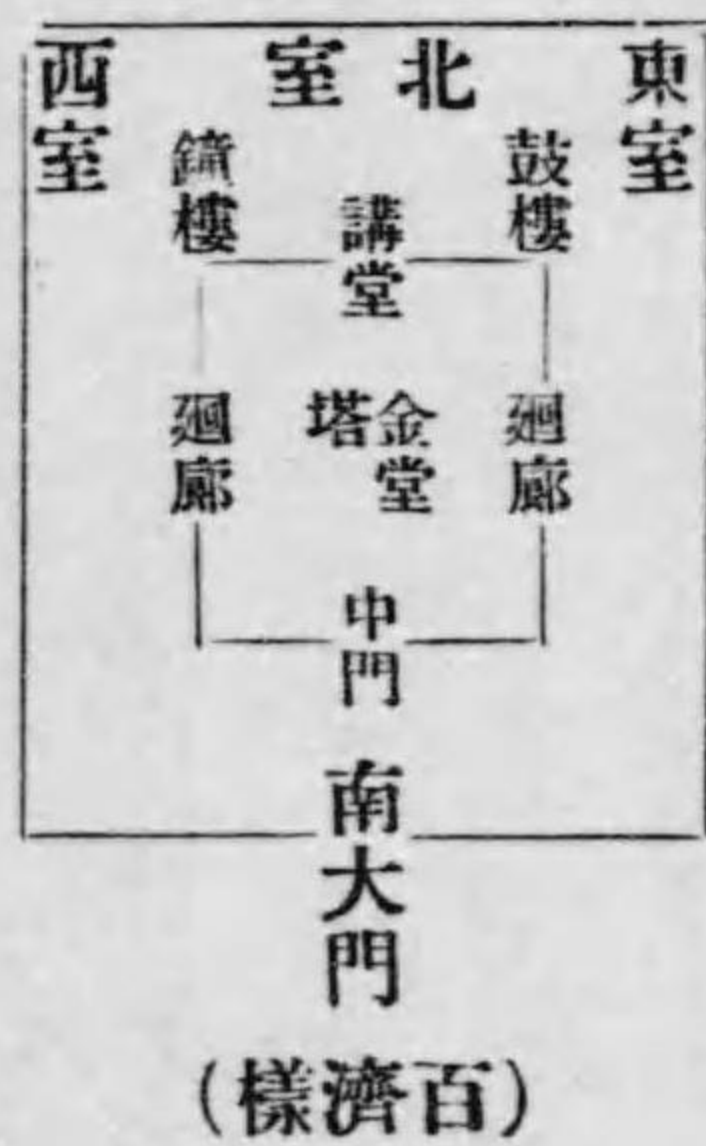
「七重」の語は上の「奈良」と云音と重ねて調子を取り、語の上に於て下の「七堂」の「七」の字をも呼起し、更に下の「八重櫻」へ、七重八重と云一續きの語の關係を連ねて居るのである。一體この句は内容よりも外形の方に重きを置いた句である。「七重」の語は調子の爲に置いたので、又どうしてもこの語が無くては、外形の妙が宛轉たる訣に行かぬのである。

「七堂伽藍」と云語に就ては、日本百科大辭典に伊東氏の頗る要領を得た解があるから全文を引用する。

「七堂伽藍」佛教伽藍の規模悉く典型に適ひて具足せるもの。悉堂伽藍と

も書す。七堂とは必しも七箇の堂をいふにあらずして、堂宇の具備せるをいふものなるが如し。我國最初の七堂伽藍は、佛教渡來の當時百濟より傳へたるものにして、名けて百濟様七堂伽藍と稱す。攝津の四天王寺伽藍、大和の法隆寺伽藍は即ち其實例なり。次で唐と交通を開始するに至り、唐様の七堂伽藍我國に行はる。東大寺招提寺興福寺等みな其好例なり。百濟様と唐様との規模の差は簡明なり。彼に在ては金堂と塔とは廻廊の内部に遊離して建ち、塔は一基なり。此に在ては、塔は廻廊の外に出で、二基相對して立ち、金堂は廻廊の後邊の中央に立てり。平安朝の天台眞言兩宗の七堂伽藍には一定の典型なきが如し。鎌倉足利時代の禪刹には別に特殊の典型あり。即ちいはゆる禪宗七堂伽藍と稱するものにして、三門・佛殿・法堂、方丈一列に前後に相並び禪堂・經藏・鐘樓・浴室・車司等其左右に

適宜に配置せらる。京都の五山及大徳寺妙心寺等みな其適例なり。其他の各宗に於ては、堂宇に特殊の配置法あれど、七堂伽藍の制嚴存せず。



(宗 禪)

此句の七堂伽藍は、先づ唐様の七堂伽藍を指したものと云へる。

八重櫻は昔から奈良の名物になつて居る。興福寺の名木である。一條天皇の時には、この櫻保護の爲に伊賀余野の庄を寄附せられ、それ以來花時には余野の里人が番人に出張させられたものであつた。其の木の種續きかどうか知らぬが、今も興福寺に八重櫻が栽培されてある。

さてこの句の意は、奈良には七堂伽藍の寺もあり、又八重櫻もある、と云だけのことである。七堂伽藍と八重櫻とで奈良の莊嚴を描いたものである。前にも云つた通り、この句は外形に重きを置いたものであるが、この句法は、彼の詞花集卷一

一條院御時奈良の八重櫻を人の奉りけるを其折御前に侍りければ其花を題にて歌詠めと仰言ありければ

伊對大輔

いにしへの奈良の都の八重櫻けふ九重にほひぬる哉

に做つたものである。この歌は奈良の八重櫻のことを云つて「八重九重」の語の繋ぎで飾り、この句は同じく奈良櫻を云て「七重八重」の語の繋ぎで飾り、且つその「七重」も「奈良」の韻きから呼出して來たのである。

この「七重」は一方では佛經の莊嚴を現はすに用ふる七重と云語を借りたものだと鳴雪翁は云はれたが、私にはどうもまだ左う説きたくなく思はれる。

○ 衰へや齒に食ひあてし海苔の砂

名高い句である。秋聲會の人達は竹冷先生をはじめ、この句を悪句だと云

ことに定めて居られるが、私はしみじみ佳い句だと思ふ。

海苔に交つて居た小さな砂を、齒にチリ、と噛みあてたのである。それが著しく齒に響いた。こんな小さな砂を著しく感ずる、と其時身の老境に入つたことを思ふたのである。

艸の枕に寝あきてまだほの暗きうちに濱の方に出で、

明ぼのや白魚白き事一寸

野ざらし紀行に出て居る句である。こゝに擧げた前書も同書の文である。

貞享元年の冬伊勢の桑名に泊つた時、朝早く目がさめたので、淡暗いうちに濱邊に出て見ると漁夫が白魚を取つて居た。それを見て成つた句である。

「明ぼのや」この語で碧と丹と不思議に和して明るくなりつゝある曉天が目



に浮ぶ。そして文の續きによつて桑名の濱の波が其の空の下に展じて居る様も浮ぶ。物蔭はまだ暗い。網にかゝつたの竹籃の中なの、白魚が白く光つて目に着く、まだ冬なれば僅に一寸ほどである。

「明ぼのや」と天地を包括した大まかな景を云つて、その明ぼの景中一寸の白魚の白き光と云細微なものを指摘して、その大と小とが離れず面白く結びついて、快き感じを興へて居る。「白魚白き事一寸」と云云方の、なだらかで無く、鋭く強いのが、冬の曉の白魚の光と云ふ寒い鋭い感じを自ら寫して居る。

この句が普通春に編入されて居るのは、季節に白魚は春と云ことになつてからである。この句の白魚は冬の白魚である。芭蕉などは今日の多くの俳人のやうに季節に捕はれ季節に使役されはしなかつた唯眼に映じ来る萬象、

唯それを捕へて句にしたのである。

芭蕉の句には前書無くてはわからぬと云のは先づ無いと云つて宜いのであるが、この句などは、紀行文の中にあつて、始めて句の意味のわかる句である。「一寸」の文字でまだ春にならぬを表はしたと辯護する人があつても、それは無理と云はねばならぬ。春の白魚でも一寸位のが多くある。句だけ離しては春とも取れる。そして句だけ離してはこの白魚が何處に在るのか解らぬ。あの文中にこの句があるので、始めて「明ぼの」と「白魚」の面白さが出るのである。句のみにしては朦朧の句たるを免れぬ。面白かるべき句であつて、この瑕のあるのを私は惜む。

杜甫の「白小」と云詩がある。白小は白魚のことであるげな。「白小群ニ分命、天然二寸魚、細微露ニ水族、風俗當ニ園蔬、入レ肆銀花亂、傾レ箱雪片虛、生成猶

拾卵、盡取義何如、此詩の「二寸魚」と云句を踏んだ作だと云説もある。左  
う云はなくても解される句ではあるが、杜詩は芭蕉の愛吟したものであるか  
ら、或はこの「二寸」が頭に浮んで、さてまだそれに至らぬ冬の白魚を現さむ  
が爲に「一寸」と云語を思ひついたのでかも知れぬ。

鮎の子の白魚送る別れ哉

芭蕉が常陸へ行く時、その江戸出發の際に送つて呉れた人々に對しての挨拶の句である。送る人を鮎の子に譬へ、行く己れを白魚に譬へたのである。白魚と云美しいものに己れを譬へると云ことが一寸自慢らしく聞えるが、左う云積りでは無い。白魚は春きりのもの、鮎の子はこれから追々發展の未來を有つて居る。自分はもうこゝらで下り坂の者だ。貴君方はこれからの人だ、

と云意を聞かしたのである。

さらりとはして居るが、どうも面白くない。

蜺子贊

白魚や黒き眼を明く法の網

蜺子と云のは支那の禪僧である。宋の道原と云僧の編した景德傳燈録にこの人の事が出て居る。それに斯うある。「京兆蜺子和尚不知何許人也、事迹頗異、居無定所。自即心於洞山。混俗於闌川。不著善道具、不循律儀、常日沿江岸、採掇蝦蜺、以充腹、暮即臥東山白馬廟紙錢中、居民自爲蜺子和尚、華嚴靜師聞之、欲決真假、先潛入紙錢中、深夜師歸、靜把住問曰、如何是祖師西來意、師違答曰、神前酒臺盤、靜奇之、懺謝而退、後靜師化行京都、師亦至、

焉、竟不ニ聚レ徒演フ法、惟伴狂而已。形や習ひの末に捕はれず天空海濶の僧である。

句は、法の網の中にかゝつてる白魚がバツチりと黒い目を開いてる、と云ので、蜺子が佛教の爲に大悟の眼を開き得たと云ことを白魚に寄せて云つたのであらう。

蜺子といへば、いつも網を持つて、所謂蝦蜺を取つてる所を描いてある。この贊をした繪もさうで、繪中に網があるので其の縁で法の網と云つたのである。

伏見西岸寺任口上人に逢うて

我衣に伏見の桃の雫せよ

貞享二年に逢つたのである。西岸寺で面會した。この任口上人はこの寺の三代目の和尚で徳も高く又俳諧も弄ぶ人である。伏見あたりは桃の名所で、桃山と云地名もある。この句の意は、伏見の桃から露下りて我が衣を潤ほせかし、とのことで、含めたる意は、貴僧の教化を被りたい、私の蒙を啓かるやうな一言でも授け給へ、と云のである。厭な句である。

草庵に桃櫻あり門人に其角嵐雪あり

兩の手に桃と櫻や草の餅

芭蕉には珍しく自慢らしいことを云つたものである。「未來記」に、これを立句として、嵐雪其角が句を續けて、三吟の歌仙を成してのを見ると、二人が芭蕉を訪うた時の句に違無い。折しも陽春で、庵の庭に桃も咲き櫻も咲

いて居る。そして目の前に秀才の門人二人が顔を揃へて居る。この時芭蕉は餘程上機嫌で、意氣軒昂と云やうな氣持になつたものと見える。

兩手に花と云諺のやうに、自分は兩手に桃と櫻を有して居る、と誇つたのである。實際庭前に桃も櫻もあつたのであるが、それを其角嵐雪に譬へたのである。「草の餅」と云座五がひどく拍子抜けがして居るが、草餅が實際其場に茶受けに出て居たのでは無からうか。左うで無いとしても、自らの草庵の無造作な趣を、無造作な「草餅」と云もので顯はしたのであらう。

芭蕉が得意になつた様子が見えて可笑しいだけで、句としてはどうも佳いと云ひ難い。

### 内裏雛人形天皇の御宇かとよ

談林風であつた時代の句である。内裏雛を見て、雛の國家と云ものを思ひ浮べたのである。戦記物語や謡曲や何かに、何々天皇の御宇かとよ、云々と云書出しがある。雛の國家では「人形天皇の御宇かとよ」だらう。と洒落れたのである。

談林の面白みは又別のもので、一概に幼稚だと云つて棄てたものでも無い。しかし其の面白いのが甚稀である。この句などは稀なるもの、一つである。誰もこの句が面白いと見えて、節句の繪の上などによく書いてある。

### 草の戸も住みかはる代ぞ雛の家

芭蕉の紀行文中最も有名な「奥の細道」の開巻第一の所に次の如くある。月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人なり。舟の上に生涯をうか

べ、馬の口捕へて老を迎ふるものは、日々旅にして旅を栖とす。古人も多  
 く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか片雲の風に誘はれて、漂泊の思  
 ひ止まず、海濱にさすらへ、去年の秋江上の破屋に蜘蛛の古巢を拂ひて、や  
 や年も暮れ、春立る霞の空に、白川の關越えむと、そいろ神の物につきて  
 心を狂はせ、道祖神の招きにあひて、取る物手につかず、股引の破をつ  
 り、笠の緒付けかへて、三里の灸すゆるより、松島の月先づ心にかゝりて  
 住める方は人に譲り、杉風が別墅に移るに、

草の戸も住替る代ぞひなの家

面八句を庵の柱に懸け置く。彌生も末の七日、明ぼの、空朧々として、月  
 は在明にて光をさまれるものから、不二の峯かすかに見えて、上野谷中の  
 花の梢又いつかはと心細し。

とある。「風流の勇み」とも云やうな壯氣が互つて居る文章である。そしてこ  
 の句が爰にある。即ち奥の細道中の句の最初に載せられたものが是である。  
 文中「住める方」は即ち芭蕉庵で、「杉風が別墅」は採茶庵である。杉風はも  
 と二つの別墅を持つた。其の一つが芭蕉庵で、一つが採茶庵で、その芭蕉  
 庵は芭蕉が貰ひ受けた形になつたのである。芭蕉は「奥の細道」の旅行に際  
 し、發足よりずつと前から色々と準備し、この庵を人に譲り、暫く採茶庵に  
 居て、寒さの薄らぐを待つたのである。

この句は語が平易でありながら、云ひ方がどうも判然せぬ、徹底せぬ。「草  
 の戸も住みかはる代ぞ雛の家に」と云やうに解する外無いと思ふ。

草の戸は茅屋と云意である。我が寂びれた芭蕉庵も、住む人が變る時代が  
 來たぞ、貧しき獨居の俳人我れが去つて、あとは賑やかな人の住家になつた、

と云ので、折柄雛の節句の頃であるので、賑やかな人の住居と云ことを「雛の家」と喩へたのであらう。「雛の家」と喩へたのは、芭蕉の庵のあとに住込んだ人が、俳人などで無く世間の人であつたのを云つたものであらう。

一葉集にはこの句の前書に「はるけき旅の空思ひやるにも聊かも心にさはらん、物むづかしければ、日頃住みける庵を相知れる人に譲りて出でぬ。此人なん妻を具しむすめ孫など持てる人なりければ」とある。この前書によれば「雛の家」の意は實に明瞭である。妻や娘や孫などの可愛らしくワヤ／＼賑やかな、花やかな様子を喩へたのであることになる。しかしこの前書の出所が不明である。一葉集の前書と云ものは往々疑はしく思はれるのがある。芭蕉庵は六疊一間の家であるのに、そんなに家族の多い人が引越して來たと云ことも稍受取れない。

あやまれば。後集の「雛の家」は「芭蕉の庵のあとに住込んだ人が、俳人などで無く世間の人であつたのを云つたものであらう。」

「奥細道菅菰抄」には、この句を註して、「頃は二月末にて上巳の節に近き故に、雛を商ふもの、翁の明き庵を借りて賣物を入れ置く所となし、によりて此吟ありといふ。勿論雛の家箱は、或は二つの人形を一箱になし、或は大小の箱を取りかへなど、年々其收藏の定なきものなれば、年々歳々花相似歳々年々人不同の心ばへにて、人生の常なきを觀想の吟なるべし」とある。雛の入れ場所にしたから「雛の家」などは便利至極な解であるが、これは文字に拘泥して附會した説である。丁度、兼好法師家集に、

三月ばかりつれづれと籠り居たる頃雨の降るを

ながむれば春雨降りて霞むなり今日はた如何に暮れがてにせむとあるのを見て、彼が徒然草を書き始めたのはこの歌を作つた時だ、と云説を成した人の誤と同じである。「つれづれなる儘に」と云徒然草の書き出し

の「つれづれ」と云語と同じ「つれづれ」と云語がこの歌の端書にあるので、この語に拘泥してこんなことを云ひ出したのだ。「つれづれ」は退屈と云ことでは無いか。兼好が退屈を感じた事が一生にこの歌の時一度だつたと思つてゐるのか。困つた人達だ。この雛人形入置場説も矢張り斯う云困つた人達が云出したので、菅菰抄著者の梨一がそれを信じて書いて置いたのである。「此吟ありといふ」と書いてある。

若し實際芭蕉の庵がお雛様の入れ場所になつたと云なら、これア實に面白いことで、芭蕉をして手を拍つて興がらしむる事柄である。そんな趣味のある事を彼が奥の細道の本文に書かずに置く訣が無いのである。句選年考に、この菅菰抄の記す所に對して「案するに雛商ふ人にあらずとも俗ならむ人には此吟あらむか」とあるのは當然のことである。

青柳の泥にしだるゝ沙干かな

或書にはこれに「重三」と云前書がある。重三は三月三日で、沙干の最なる日となつてゐる。この前書は有つても無くても宜い。春光煦々たる沙干の光景の一部を寫生した句である。

海岸に柳がある、その柳は海上に斜に伸びてゐて、常にその枝は水の上にしだれて居る。それが沙干の日に見ると、いつもの水が干て、泥になつてゐる。その泥の上に例の通りの姿で岸の柳の枝がしだれて居る。

非常に佳い句と思ふ。私はこの青柳は唯一本と見たい。そして沙干に人々の遊んでる光景を思ひ浮べたくない。この句は左うした賑やかな沙干を寫さずして、淋しき海岸あたりの沙干を寫したものである。よしや向うの方に子

女の群があらうとも、それを見ずして、柳のあたりのみを見ての句である。

群衆の中にしだれて居る柳では無い。  
無風と云ことがこの句によく出て居る。そして海の泥の春日に燦めきわたつて居る様がよく目に浮ぶ。一誦長閑な感を十分に起し得る。

永き日を囀り足らぬ雲雀かな

春の永日を朝から夕まで絶えず雲雀の囀りが聞える。この日永さに終日囀つてもまだ囀り足りないといふやうな元氣である。と云のである。この元氣のよさを吟じたのである。

或書には「永き日も」とあるが、これは誤であらう。「も」では如何にも理窟に落ちて、且つ幼稚になる。

訪問した門人と語りつづけた時の譬喩だとの説もあるが、私はどうも譬喩では無いと思ふ。

原中や物にも着かず啼く雲雀

野原の中である。広い野の空に雲雀が啼頻つて居る。「物にもつかず」即ち何物にも依らず、たゞ広い大空で啼いて居る。それが頼り無いやうな、危いやうな感じがする。併し又考へやうによつては、何物にも依らぬと云、豪放な感じもある。この句はこの後者の感じを云つたものであらう。

雲雀より上に休らふ峠かな

吉野行脚の折、多武峰から龍門へ越える臍峠と云峠で詠んだ句である。し



ばらく休んでると、高い峠で、空に囀つてる雲雀が自分より下の方に聞える、と云のである。其所がら、時節柄、我より下に雲雀を聞くと云事は趣があるけれども、云ひ方が餘韻が無くて又美しき客観になつて居ないので、駄句になつて了つて居る。

雲雀啼く中の拍子や雉子の聲

雲雀が節細かに絶えず啼いてる。其の聲の中へ、時々雉子の聲が交る。其の聲は鋭く且つ短い、時々啼くだけである。それが、鼓笛の拍子を太鼓が取つて行くやうに、雲雀の聲の拍子を取るやうである。

なる程春の山路であひさうな事であるが、どうもこの「中の拍子」と云のが厭味に聞えてならぬ、但し芭蕉は可なり苦心の末斯う置いたのだと云事が

欠

# 欠

原因があるだらうと思ふ。

雉子は蛇を食ふと云はれて居る。なんでも彼は蛇にあふと恐れられた様子をして縮こまつて居る。蛇はグル／＼と雉子を巻く、十分巻締めさせた所で翼を強く張ると、蛇の身は断られて了ふ。それから食ふのだ。など、云話がある。實際そんなことがあるのかどうか知らぬ。又蛇を食ふと云其の事のみでも、實際あるのかどうか知らぬ。この句を解く上に其の實否を動物學者に聞く必要は無いから聞かない。(句の趣に關係する疑問は、この講話を書くに就て随分各方面の人に教を乞ひ來つた。動物學者にも、植物學者にも) 兎も角雉子は蛇を食ふものだと云はれて居る。それだけで可い。雉子の聲は鋭い。何となく秋の雁の聲を聞くと同じ趣で、その鋭さに哀な所がある。それが普通の感じである。しかしあれは蛇を食ふと云ことを聞いて、その氣になつて聞く

と、あの鋭い聲が怖しい韻をなして聞える、と云つたのである。

雀子と聲鳴きかはす鼠の巢

春雀の子が生れる。軒の巢に生れたてのがチュウ〜云つて居る。又天井うらか何處かに鼠の巢があつて、そこでもチュウ〜鼠の鳴き聲がする。それを疊の上で聞いて、兩方で同じやうな聲で鳴き合つてゐるアと云つたまでである。ヒツそりとした茅屋を思はせる。しかし佳句とは云ひかねる。「鼠の巢が鳴きかはすと云のは巢そのものが鳴く意になるなど、云のは文法拘泥の論鼠の巢でチュウ〜聲がすることを云つたと云ので可い。」

蝶の飛ぶばかり野中の日影かな

日影は雅語の常の意味なる通り日光である。春の日影一面に野に満ちわたつて居る。森として居る。物皆春光に酔うて眠つて居るやうである。風も無い。この間に物あり小さく細かくチラ〜と飛びめぐる。蝶である。唯蝶のチラ〜と飛ぶを見るのみ、斯う云光景である。晝寂、午寂の春を寫し出した、よい句と思ふ。「蝶の飛ぶばかり」で、意味が切れる。

この「日影」をどう云ものか俗語の日影と取り即ち日の陰と取り、野中の物皆日に照らされて、唯蝶の飛ぶ其下だけに小さな陰があるだけ、と云説がある。説があるどころか古來の説は殆どこれに定まつて居る。をかしたることと思ふ。蝶の影法師と云やうな小さな陰に目を着けるなら、野の中の草や石の影だつて目に着きさうなものでは無いか。蝶の影しか何も影が無いとは、沙漠へでも行かなければ出来ない句では無いか。日影をこんな風に解したの

は「蝶の飛ぶばかり」を下へ直接に續けて了つて考へた爲であらう。

起きよ／＼我が友にせむ寝る胡蝶

面白い句だ。芭蕉躍如たる句だ。蝶が花の上かなんかに止まつてチツとして動かずに居る。これを寝て居ると見なして、オイ蝶よ、起きよ／＼、起きてヒラ／＼飛べよ、我はそれを見て、その飛びまはる汝を友達として慰まう程に、早く起きろよ。さう寝込んで了つては淋しくて仕様が無い。と斯う云つたのだ。

人寰に在て人寰を忘れ、飄々として蟲をも鳥をも交友とする、高逸の詩人の心持。これをわざと脱俗らしく云つたのだ、と思つて居る間は、芭蕉が解らないのである。

莊周の故事を引いて來た註があるが、少しも莊周などの關係の無い句である。

古池や蛙飛込む水の音

句としてこれ程人口に膾炙してゐるものはあるまい。會社の小使でも、馬車の別當でも、子供でも知つて居る、この句の故に蛙と云ものが俳諧の象徴ともなり、よく俳書俳雜誌の表紙の意匠にも使はれて居る。

句の意は説明するまでも無い、明かである。古池がある。春日静かなる午後であらう。蛙がドブーンと飛込んだ。其の時に湧いた閑寂なる印象を、少しも主観を入れないで、唯其儘に云つたのである。この句は禪の意を寓したもので、禪學に通じなくてはこの句の意味はわからぬやうに云人は駄目で

ある。かう云界を、かう云風に云放つと云事は、芭蕉が禪の素養があつたので爲し得たものではあらう。併し禪を知らずしてこの句の趣は無論解される。句は詩である。この句は詩である。詩を離れた禪語道語では決して無い。

この句は古來非常に神聖視されて來たが、私はこの句を芭蕉一生の句中の最傑作と稱するにはどうも躊躇する。又これを過重した反動で、この句を所謂月並の標本視して、頗る拙劣な句と評し去る人がある。私は又それ程輕んずべき句でも無いと思ふ。

この句は歴史的に於て大に重んずべき句であることは定評である。この句は貞享二年頃に深川の芭蕉庵で吟じた句で、句に所謂古池は杉風の古い生洲を指したものとのことである。芭蕉はこの句を偶々得て、自ら開拓すべき界を判然と意識したのである。其の界と云は、一口に云へば閑寂である。サビ

である。長く云へば、淋しく沈滞した中に、云ふべからざる徹底の氣ある界である。尤もこの句の前にも芭蕉の作つた句に屢閑寂に觸れたものがある。

枯枝に鳥のとまりけり秋の暮

木枯の身は竹齋に似たる哉

山路來て何やら床し莖草

野ざらしを心に風のしむ身かな

などである。しかしよくよく比較して見ると、これ等の句にはまだ私がある。或は街氣がある。或は眞の創意で無い。或は云足らぬ。この古池の吟に至つては渾然として圓滿具足である。閑寂の界が包括して寫取られて居る。

私もこの句を詰らぬと思つて居た。左うも書いたこともある。併しそれは餘りに聞慣れて居る爲であつた。よく今日味つて見るにまことに芭蕉の眞髓

はこの句に實によく現はれて居ると思ふ。

或老軍人で俳諧を研究した人が、其説を書いた厚い書き物を、先般故あつて見た。それにこの句のことを書いて、世人はこの蛙の飛込む音の特色を顧みない。この特色を味ひ知つて始めてこの句の趣の全部がわかる、と云て、蛙の水に飛込む音を屢聞いてみた事や、蛙と同重量位の物を水に投げ込んでみて、其の音の到底蛙の音の幽韻に及ばない事を確めた事などが書いてあつた。私はこれを読んで甚だ滑稽に感じた。しかし今思ふに、この蛙の飛込む音の頗る幽玄の韻あることも餘程注意すべきことであらうと思ひついた。その韻の特色が芭蕉の興感を起させた一因では無からうか。

這ひ出でよかひやが下の蟾の聲

この句句選には丁度この順序で、春の部に入れてあるけれども、それは誤で、夏の句である。蟾が今夏の季になつてから誤だと云のでは無い。蟾はもう晩春には或は出るかも知れぬが、そんな問題で無く、芭蕉がこの句を夏に作つたと云のだ。奥細道の元祿二年の夏の所に出て居る。尾花澤で清風と云風流を解する富豪の許に行つた其折の句である。

「かひや」は飼屋で、蠶を飼ふ爲に假に建てた小屋を云。その飼屋の下で蠶の微かな聲がするのを、芭蕉聞付けて面白がり、オイその鳴いてる蠶よ、這ひ出で来いよ、と云つたのである。

「かひやが下の蟾」なら宜いけれども「の聲」と續けては、聲と云無形のものに這ひ出でよと命ずることになるでは無いかと云人があるなら、其の人は狭い文法に捕はれてるのだ。この句の云ひ方は、飼屋が下で蟾の聲がする、

這出て來い、と斯うである。

二股に分れそめけり鹿の角

鹿の角と云ものは年々春に落ちて、夏に入つて新しい角が生えるものであるさうな。初めは瘤の伸びたやうな工合に唯一本出てやがてそれが二股に分れ、それが又枝が出て、段々とあの樹の枝のやうな形になるのである。

だからこの句は夏の部に入るべきものである。前にも云つたやうに、この講話は句選年考の順序に従つてやつてるから、こゝへこの句も入れて置く。つまりこれは芭蕉句選の誤なのである。

芭蕉、鹿の角のもう一本のから少し枝が出来て、二股になりかけたのを見てあゝもう二股になりかけたぞと、其事に興味を起して、其儘を云つたのであ

る。あの二股に分れかけた妙な形が、未來の堂々たる角になる本なのだ、と云感もあらう。併し此感を主にしてはいけない。唯斯う云鹿角の或特殊の場合の形を寫したと云のが主である。斯う云句は一般には屹度評判の悪い句であらうが、私は好い句と思ふ。忠實に或物を寫して行くと云例の芭蕉の態度が明かに現はれて居る句である。

この句は或書には奈良で人に別れる時の句と云やうに前書が付いてる。併し古人もこの前書に疑を挿んで居る。若しこの前書が眞のものにしても、この句は解けるのである。即ち、前に云つた通りの描寫を、やがて人と別れる有様に擬しましたのである。貴君と私とこゝで別れる。一人は右一人は左と別れる。それが別れの初めで、道の進むに従ひ或は東、或は北といろ／＼ないりくんだ道を進んで了ふ、と云感を、奈良の目前の鹿の角の有様で云つたので

ある。別れる時の句としても、前陳の鹿角の描寫と云事は動かぬのである。

鹿の角先づ一ふしの別れ哉

この句にも、友達に奈良で別れると云意の前書が付いてる書がある。私思ふに、この句は明かに離別の句に違ひない。句の表白法が確に左うである。句の意は前の句の解と全く同じである。鹿の角の二股になりかけた様を、先づ一節別な方へ向く枝が出来て、こゝに分離と云象が現はれた。これが分離の初めで、追々一節から又一節枝が出来て行く、と云つて、前句の解の後部のやうな別離の情を述べたのである。

私思ふに前陳の如くこの句は明かに別離の句の云ひ方で、別離の情が判然主になり、角の描寫が客になつて居る。情を現はす手段になつて居る。そし

て前の句は句としては全く描寫だけの云ひ方である。情を主とはして居ない。誰が見ても解るやうにこの二句は同時に出来たものに違ひない。そして付度するに、この「一ふし」の方がさきに来たのであるが、情が主になつて居る爲に厭味な句になつたので、更に作り直し「二股」の句を成し、これならば句の上純描寫で、厭味が無いので、これで満足したのでらうと思ふ。  
なほこの二句の外に「ふりかへる雄鹿も角の別れ哉」と云句も同時に出来たと云説もある。この句は三句中最も拙だと思ふ。

猫の妻竈の崩れより通ひけり

戀猫の様である。猫の妻は即ち牝の猫を人間らしく云つたのである。それが戀の相手の所へ、ヘツツイの崩れた所をくいつて行く、と云のである。



この句は明かに伊勢物語から出て居る。同書に、業平が二條后へ忍び通ふ  
 と書いた所に「昔男ありけり。ひんがしの五條わたりに、いと忍びてい  
 きけり。みそかなる所なれば、門よりも得入らで、童の踏みあけたる築地の  
 崩れより通ひけり」とある。「ついち」は柱と板と土で築いた垣である。業平  
 は築地崩れより通つた。この猫の妻はへつつい崩れより通ふ、と云つた  
 に面白みがある。伊勢物語の言を其儘使つたので、業平と猫と云不思議な比  
 較が出来て可笑しく思はせるやうになつてゐるのである。

「麦飯にやつるゝ戀や猫の妻」

これに「田家ありて」と云前書のある書がある。この前書は尤なもので  
 必要なものである。

「麦飯に」の「に」は句によくある境遇を指示する「に」である。「鶯に朝飯遅  
 き下宿かな」の「に」である。田舎の瘦せた牝の猫を、春の交尾期に見た時の  
 感を云つたのである。あの牝猫は麦飯を食ひつゝ、戀にやつれて居るのぢや  
 なアと云つたのである。「やつるゝ」と云語を「麦飯に」にくつつけて了ふと  
 麦飯ばかり食つてるから痩せてると云やうに解されるかも知れぬ。それは誤  
 である。「やつるゝ戀」と云のが離るべからざる一續きの語である。やつるゝ  
 原因は勿論戀である。それに田舎の猫故麦飯を食うてると云をも現はして  
 るのである。麦飯食ひながら戀にやつれて居る、と云田舎猫の戀である。稍  
 をかし味がある。洗濯にやつるゝ戀といへば、下女の戀である。さう云云ひ  
 方である。

これを麦飯そのものを戀の相手とする説があるが、それは非常識である。

語に食ひついて、趣を第二義にする、主義の學者の下にて養成される研究家先生などのよくやりさうな誤である。

一書には「やつるゝ戀か」とある。これは問ふ形になつて居るだけで、大した趣の差は無い。斯うすれば、麥飯食ひつゝ戀にやつれて居るのか、あの田舎猫よ、と云のである。

### 猫の戀止む時 閨の朧月

前に出た猫の戀の句は、兎角可笑味があつたが、この句には少しも可笑味は無い。この猫の戀は艶かしい趣の一部になつて居る。

猫の戀止む、とは猫の戀の聲が止んだのである。オギャア／＼と人の赤子のやうな聲で喧しく鳴き立て、居た戀猫の聲が、夜稍更けて止んだ、ヒッソ

リとした。戀猫は満足を遂げたのだらう。そのヒッソリしたと感ずる頃、我が寢室に、春月朦朧としてさし込んで来た、と云其時の情景である。作者は寢室即ち閨に居ての吟である。

この「閨」は何と無く獨寢ならぬ閨のやうな感を與へて居る。もつとも芭蕉がさう云際によんだ句だと断言するのでは無い。しかし左うした情を想うての句と思はれる。非常に佳い句で、艶冶の氣天地に満つる趣がある。

### 山路来て何やらゆかし 堇草

「野ざらし紀行」に出て居る句である。京都伏見の事が書いてある、其の次に「大津に出る山路を越て」とあつて、この句が出て居る。逢坂山あたりでの句かと思はれる。

山路を獨り來ると、草の中に莖の紫が目につく。何だか斯うそれに心が優しく集注される心持になつた。莖そのものに引き着けられるやうな、情の慄へを感じたのである。「ゆかし」と云語は、たとへば簾が垂れた中に女の居る様子であるが、簾の爲にそれが見えぬ、どうか簾の奥が見たいと云情が起る、と云場合があるとすると、その場合の心は「簾の奥ゆかし」と云つて現はすのである。「ゆかしき人」といへば、其の人の性が奥深くて、そして其の奥に非常に美しい或物を藏してゐるやうに思はれる、しかし其の心の奥の或物がまだこちらの手に捕へることが出来ぬ、と云場合の情が現はれてるのである。この句の「ゆかし」もこれらの例の通り、莖そのもの、心と云やうな物にこの人間たる己れの心が交渉したい、と云氣持を現はしてゐるのである。

この句は初め「何と無く何やらゆかし莖草」としたのを、後に作りかへた

のである。「山路來て」と云とを添へたので、ゆかしと云情のみならず、莖を中心とした、あたりの景も想はれるやうになつたのである。

山には莖は無い、何となれば莖を山に詠んだ歌が無いから、とヤツキになつて主張する人(湖春)があつた。斯う云人は文字に記されて無い現象は總て否定する愚者である。この愚者が古來註釋者に多い。それから又それに反對して否莖を歌に詠んだ例はあるといきまいた人(去來)もある。この人も同じく愚者だ。歌など眼中に置くのが誤である。本など眼中に置く必要は無い。實際山路に莖が生えぬと云とがあるもんか。芭蕉は唯眼前に見たものを其儘句にしたのである。唯自然を眼中に置け。

又山路を越てとあるのは、山路を越えてしまつて平野に下りて、と云意に解する先生がある。この人は又日本の語法を知らない人である。斯う云云ひ

方はそれこそ歌の端がきなどに、いくらもある。

語の使ひ方に就ては、本を眼中に置かねばならぬ。そしてこの語法は、苟くも國文を少しでも覗いた人なら、誰でも知つてるやうに、「山路を越える時に」と云意で、越えつゝある山路の中で詠んだものなる事を現はして居るのだ。

悼呂丸

當歸よりあはれは塚の堇草

呂丸と云人は、出羽の人で、本名を圖司左吉と云、俳號を呂丸とも露丸とも云つた。國を發足して芭蕉庵に逗留し、それから京都に行き、その一條に滞在して居たうちに客死した。支考と一緒に大和の春を見ようと契つて居



たが、それを果さずに死んで了つた。呂丸の墓が何處に築かれたかはわからぬ。多分京都に葬つたことであらう。その墓を、芭蕉が程經て見て、この悼句を作つたものらしい。呂丸の死んだ年には、芭蕉は武藏に居た、この句は武藏で作つたのだと云考證もあるが、私はさうで無いと思ふ。どうも墓を實際見てよんだ句らしい。堇草などと勝手な想像をすると云事は芭蕉はやら